
異世界に転生したら妹がかわいかった

たぬきち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界に転生したら妹がかわかった

【Nコード】

N3448X

【作者名】

たぬきち

【あらすじ】

気付くと異世界に転生していた僕は妖狐に出会い、いつの間にか力が強くなっていった。その力を使い妹のリミエラを守るため、日々奮闘する。リミエラかわいいよりリミエラ。まさに僕の天使。意図せず力を手に入れた少年の成長物語。ゆるいラブコメ（予定）

シスコン・ブラコン・ご都合主義・チート注意

10/9 設定用ページを追加しました（第6話までは読まなくてもおそらく問題ありません）。
10/12 設定資料に”医療について”を追加しました。

設定資料（前書き）

解説オンリーのため全く面白くありません。

少なくとも第6話までは読まなくても全然平気のはずです。

後々世界観などでわからないことがあった場合に初めて見ても構いませんが、ここの設定に基づいて話を進めるため読まなければわからない話が出てくる可能性があります。ご注意ください。

本編に書きにくい必要情報が出次第随時更新。

更新が必要な時には最新話のあとがきに書きます。

更新時にはあらずじ部分に更新日付込で追記します。

ゝの部分がわかりにくい、解説が必要だ、と感じた場合には気軽に
お伝えください。

このページに解説を追記するか設定の見直しを行います。

現在の項目

- ・物の表現、表記について
- ・時間について
- ・季節について
- ・魔法について
- 属性の種類
- 人の属性
- 発動

・スキルについて

・医療について（10 / 12 追加しました）

設定資料

物の表現、表記について

一般的な物に関しては、地球の中と同じものがあると思ってください。

オリジナルの名前をわざわざ付けるよりも、見慣れた名前の方がわかりやすいと思います。

例えば、トマトと似た食材があった場合、それは”トマト”と表現させていただきます。

動物や武器防具など、そういったものも同様とさせていただきます。ご了承ください。

基本的には暗黙の形で元々ある固有名詞をそのまま文章に書きますが、一部のようになと表現する場合があります。

また、似た物が存在しなかった場合、それは固有の名前をつけ説明します。

時間について

1年↓10か月

1月↓約40日

1日↓25時間

とさせていただきます。

時間・分・秒についてはそのままです。

1日を25時間としているのは、人間の体内時計が25時間とされているからです。

1年で約10000時間となるからでもあります。

季節について

この世界では1年が約400日。季節が5種4季となっている。約400日というのは、日付で区切っているわけではないので年ごとに多少の前後があるらしく、正確な日にちが決まっていないから。

年明けは冬の季節で、年度明けは春の季節。

年の最初から数えて、冬↓春↓夏↓魔↓秋の季節と言われる。

春夏秋冬の4季節は2月約80日で変わり、魔の季節は更に春夏秋冬4季節に分かれる。魔の季節は約20日でその季節を変える。

季節の分かれ目は、空中マナの増減で決まる。

所謂偉い人が空中マナの増減を観測している。

空中マナというのは魔法を使用するために必要な力素のことで、一般的にはマナとだけ呼ばれる。それぞれの1年のうちで増減を繰り替えますそれを基準に季節を変えていく。

つまり、“明日から春です”ではなく、“今日から春です”という風になる。

そのため、“誕生日”というのはあまり意識されることはない。代わりに祝事の際には“誕生月”や“誕生週”というものが基準となりやすい。

マナの増減を各季節、数字で表すと、冬(1)↓春(3)↓夏(4)↓魔秋(6)↓魔冬(5)↓魔春(7)↓魔夏(8)↓秋(2)といった具合になり、魔の季節はマナ活性化の季節とも言われている。

マナは魔法使用に必須な要素のため、秋や冬に戦争などが起こることはまず無いだろうと言われている。

魔法について。

魔法は自ら生成する魔力と周囲のマナを利用し発動することができる。

魔力が増加するのは5〜15歳（成長期とも言われる）が一般的とされ、その後20代30代の安定期に入り、大体40代後半くらいから後退期に入る。

魔力は強い者の力を受け続けたり（引導）、限界まで魔力を使用してから回復に努めること（超回復）で伸びやすい。

幼いころは引導と超回復を併用し、成長するにつれ余裕のあるときに超回復を利用するというのを一般的となっている。

また、魔法には属性があり、基礎属性4種と上位属性1種、特殊属性4種が存在する。

基礎属性は水・風・火・土で、それぞれ冬・春・夏・秋に対応される。

季節により属性相性があり、ある程度力の増減がある。

例えば、冬の季節に火の属性魔法を使うと効果が弱体化する、逆に水の属性魔法は効果が強化される、など。これはマナ自体が季節の影響を受けやすく、それが魔法の使用に影響するのだと言われている。

また、それぞれの属性自体にも相性があり、水と火、風と土は相性が悪い。

これはどちらか一方がどちらかに強い、ということではなく、効果を相殺しやすい、ということになっている。水は治癒、風は補助、火は破壊、土は減衰に長けていて、相性の悪い属性は相反する力を得意としているため。

4種の属性を丁寧にかき合わせることで上位属性の雷が使える。

かけ合わせのバランスが悪いと威力が弱くなったり、最悪の場合消滅するため使える人間は殆どいない。各季節によりかけ合わせのバランスが変わってしまうのも使用の難しさの1つにあげられる。

しかしながら、効果自体は季節による影響を受けないため雷の属性魔法を使える人は重宝される。

特殊属性は聖・魔・光・闇に分けられ、人の身では血筋や加護を持つ限られた者に発現しやすいという特徴がある。

ただし、両親が同じ特殊属性を持っている場合でも親から子に必ず遺伝するというわけではない。が、隔世遺伝として発現する場合もある。

この力は魔の季節には発揮できる力が大きくなるが、他の季節には効果差はあまり見受けられない。少しだが聖光魔闇が水風火土という風に対応するため多少の差は存在する。

また、基礎属性とは違い聖魔、光闇は互いに対して弱点とされる。代わりに聖と光、魔と闇は対峙の際に効果を弱めるが互いを補助するには有用とされる。

魔物の多くは魔属性を持っているため（稀に闇属性）、魔物狩りには聖属性持ちが中心となることが多い。勿論、対属性の相性がいいだけで、基礎属性が効かないわけではない。

魔属性を持つ人間は“悪魔付き”とされ迫害されることも少ない。

特殊属性の上位属性もあるとされ、研究はされているが未だ見つからない。元々特殊属性を使える人というのが少なく、更に特殊属性を全て使えるという人がいないからだとも言われている。

人は生まれ月である程度相性のいい属性が決まりやすい。

多少の例外（隔世遺伝など）はあれど、それぞれの季節が象徴する力を使えるようになりやすく、またその隣季（魔の季節を除く）

の象徴する力も覚えやすいとされる。

そのため春夏秋冬の各季節はそれぞれ風火土水の季節とも言われる。

例えば春の第2月生まれのリオンは風属性を中心に火と水の属性を持ちやすく、冬の第1月生まれのリミエラは水属性を中心に風・土の属性を持ちやすい。

魔の季節に生まれた場合は、比較的万能に育ちやすい反面、大きな力が使えないことが多い。生まれの季節にマナが豊富なため、力が強くなりやすいと言われているが、特化した属性がないため案外平凡になることが多い。

しかし、雷の属性魔法を使える可能性が一番高いのがこの季節に生まれた子でもある。

魔の季節に生まれた子どもは稀に特殊属性持ちとなることがあり、その場合は基礎属性魔法が使えるレベルにならないとされている。

属性自体は万人が持っているが、成長期や先天的な影響が大きく、すべての人間が魔法を使えるわけではないらしい。

ただし、得意属性ならば多少使える、といった人は多いため、親が職業に合わせて生まれ月を選ぶケースもある。例えば、農家ならば水の季節を選ぶ、など。

農村ではこういった理由から誕生月が同じくなりやすい傾向がある。

魔法の発動にはいくつかの条件がある。

・必要マナの確保、占有。

威力や効果範囲により必要量が異なり、（大きな力を使うためには特に）周りにマナが多いことが条件の1つになる。

マナは確保もしくは占有と言われる自らの使用下におくことが魔法使用における必須条件で、対人戦などでは特にマナ占有力も必要な要素の1つとなる。

マナの発生は毎日行われているが、場所や季節により速度や量が異なるため濃い場所薄い場所が存在する。

- ・体内魔力の使用

マナと同じく効果により使用量が違い、枯渇すると気を失う。体内魔力は睡眠、休息などの自然回復以外に回復手段が存在しない。ただ何もしないだけでも自然と回復していくが、回復量はマナの濃い場所で睡眠をとることが一番で、同じ地における同手段での回復率はマナ占有力の強い方がより高くなる。これはマナを摂取し魔力へと変換することで回復しているため。

- ・呪文の詠唱

思考詠唱もしくは口述詠唱のどちらかが必要で呪文自体は人によって違う。これは魔法の発動にイメージが追従するためである。基礎的な魔法に関してはイメージがしやすいため公開されている呪文も多いが、それ故に同じ効果を持つ別の呪文も存在する。

思考詠唱の方が口述詠唱よりも発動が早く、効果が弱い。

口述詠唱の方が思考詠唱よりも発動が遅いが、効果に安定性がある。

- ・コマンドキ発動鍵の発言

呪文の後に続けることが必要で、これを行わなければ魔法の発動が出来ない。

発動鍵自体を詠唱の一部とすることで“詠唱破棄”と呼ばれる即時発動技が存在するが、効果は大きくない。しかし詠唱発動時にある“ラグ”が存在しないため、魔法の連続発動時など、使用する人は意外に多い。

単体戦では思考詠唱（もしくは詠唱破棄）、集団戦では口述詠唱の方が好まれる。

スキルについて

人が使う、“魔法”とは異なる力。

修練や特定行動により使えるようになる力のことで、基本的には発動に条件はない。

スキルを覚えることで、覚える前に意識をしていたことが無意識で出来るようになる。

主に汎用スキルと特殊スキルに分かれ、コモンは修練を積むことで獲得できるものを指し、一般職に就く際や日常生活に非常に有用なものとなっているケースが多い。勿論、日常生活等以外でも活躍するコモンも数多く存在する。

ユニークは先天性のものと後天性のものがあり、“他にあまり見ないもの”という意味を持っている。同一のユニークを持っている者もいる場合があるが、その数はコモンの習得者に対して圧倒的に少ない。

ユニークの場合、例外的に発動条件が発生する場合がある。

医療について

治療などを受ける場所は個人技術を除き3か所に分かれる。

主に重症、重傷患者が行く医療院。

所謂街のお医者さん、診断所。

個人が開いている医療所。

医療院は大きな街にしか存在せず、その規模も大きい。

しかし魔法を使い多くの症状を治療できることから医療費が高く、一般人はあまり使わない。

所属する医師、看護師は魔法を使えることが必須条件となっており、その殆どが水の属性を持っている。（対属性耐性がない人の場合、火の属性が必要なこともあるので全員ではない）

診断所は街規模（村と言われる程度ではないところが多い）で1

つはあると言われ、医療院のある街にも必ず存在する。

魔法医療ではなく技術医療を学んだ人が診断医として就いていて、街人がよく使うのが特徴。基本的には薬の処方や症状の診断などを行う。

診断医は魔法を使えなくても問題ないが、技術を磨いたためスキルを持った人が多い。

診断価格は最も安い。

最も需要が高いのが医療所。

こちらは水の属性魔法を魔法医療として使えるものの、医療院に所属せず個人的に患者を診るという人が開くもの。

利益よりも趣味という変わり者が多く、医療費もそこまで高くない。

しかしその数は最も少なく、いい医療所を見つけることが出来た人は運がいいとまで言われるほど。あまりにも人が集まってしまうと診断所が立ち行かなくなってしまうため、ぱっと見ではそこが医療所とはわからないようになっていている場合が多い。

随時更新中。

設定資料（後書き）

誤字脱字・感想などありましたら気軽に伝えてください。

第1話 5歳の少年

「……？ さて……どうしよう」

食事中に衝撃的な事実に気付いた俺は、小声で呟き、途方に暮れていた。

知らないうちに異世界に転生してました。
とりあえず現状を整理してみよう。

前世（？）の俺は高校生で、趣味はゲームやネットなどのテンプレ現代っ子。

死んだ記憶とかないよ？

ゲームの最中だったとかでもないよ？

そもそも俺はRPG系のゲームとかそこまでやりこんでなかったし。

あれ、どうということなの？

よくわからないけど、異世界にいることはなんとなくわかる。

雰囲気の違いってやつだね。

……ごめんなさい、適当言いました。

今の俺の名前はリオン。リオン＝ケイリス。5歳。

容姿は前世に比べてかなり恵まれていると自覚できるくらいのものだ。

母上譲りの茶色の髪に、グレーの瞳。両親に感謝しないといけな
いと思う。ありがとう！

一応、過去5年生きてた記憶がある。この状態でぽっと出てきた
わけじゃないみたいだ。

家族構成は父のレドリック、母のソフィア、妹のリミア。

どうやら父上はそれなりに地位のある上流貴族のようで、これま
での生活で困った覚えがない。細マッチョ……いや中マッチョ？

の体と藍色の髪、翠の目は20代でも通用しそうだ。

母上はいつも微笑んでいるのが特徴で、可愛らしいという表現が一番あっているかも。父上と同じく、2児の母とは思えないくらい若い。薄い茶色の髪と蒼の目がその容姿を惹きたてている。二人並んで絵画だね。

2歳下の妹、リミエラはかわいい。超かわいい。そりやもう最強にかわいい。いや3歳の子とも相手に何言ってんだよと思うかもしれないけど、ごめん。これだけは譲れないわ。リミエラちゃんマジ天使。シスコン上等！確かに両親は容姿が整っているけど、これはいくらなんでもやりすぎだと思う。プラチナブロンドの髪に澄んだ蒼の瞳はまさに天使としかいいようがない。俺が構ってやると「にーさま、にーさま」とか慕ってくれているみたいだ。あまりにもかわいすぎて思わずお持ち帰りしそ（以下略

「リオン、大丈夫か？」

「……はい、大丈夫です」

おっと、父上が食事中に突然固まった俺を心配して声をかけてくれたようだ。

家族を心配させるのはよくないね！

とりあえず身内のことは大体わかった。特に妹。

前世を思い出す前の俺がどれだけかわいがっていたかよくわかった。これから続けよう。

というか、なんでこんなタイミングで前世の記憶なんて思いだしたんだろ。

ふと前を見してみる。

ナイフとフォーク………を構えるメイドさん。
は？

いやきつと目の錯覚だよねそうだよね。

気を取り直してもう一度……。
いますよ。メイドさんがナイフとフォークを構えてそこにいらっ
しゃいますよ。

「若様、今日こそ食べていただきますよ。御覚悟を」
「えー……」

てかなんで父上も母上も傍観してるの？
そしてなんで俺はメイドさんに刃物を向けられてるの？
とりあえず記憶を再びサルベージしてこのメイドさんを思い出す。
どうやらアイカという名前のこのメイドさんは俺が生まれて少し
してからこの家に来たようだ。

俺が生まれるまでは、そこそこ……というか普通に広いこの家を
二人で維持していたらしいが、子育てに手を取られ家事手伝いの出
来る使用人さんたちを雇ったらしい。

つまりその中で主に俺たち家族の身の回りを担当しているのがこ
のアイカさん、ということだ。

料理人さんも雇っているが、この万能メイドさんも料理をしてい
るらしく、現状を見る限り好き嫌いのある俺のために努力してくれ
ているみたいだね。

……あれ？俺が悪いつてことだよな。

とりあえず俺が嫌いな食べ物ってなんだろう？と思って目の前の料
理を見てみる。

これは……野菜炒め？

一部見たことのなさそうな雰囲気のある野菜（？）が入っている
けど、たぶんそんな感じ。

そしてよく見ると細かく刻まれた緑の物体が。

もしかしてこれが俺の嫌いなものか？

アイカさんの努力を無駄になんてしちゃいけない。

これは俺のためにやってってくれてることなんだ、とそれを食べる。

「え？」

「……おいしいよ。ありがとうございます」

「あ、はい。ありがとうございます……？」

（おそらく）さっきまで渋っていた俺が急に食べたことを疑問に思っているのだろう。

この野菜は所謂ピーマン的なもので、子どもの嫌いな食べ物だと思っ。

これが食べられないとわがままを言うなんて所詮はお子様か、けっ。

……いや俺だけだね。確かに子どもの俺には少し苦く感じたが、食べやすいように細かく刻んであるし、他の野菜や調味料などで苦みを感じにくくさせてくれている。

俺のために工夫してくれるとか涙が出るぜ。これくらい我慢しなきゃいけないよな。

というか、俺の記憶が戻ったのってタイミング的にこれのせい？ 食べたときにピーマンが苦かったからとか、苦いピーマンを食べるのが嫌過ぎて現実逃避しちゃったとかそんな感じなの？

…… どんだけ情けないんだ俺。

「あら…… えらいわね。 リオン」

「いえ、リミエラに格好が付きませんから」

「まあ、リオンも立派にお兄さんになったのね」

「それに一生懸命料理を作ってくださったアイカさんに悪いです」

「！？ 若様、私にお気を使われなくてもよいのですよ。 もちろん食べていただけた方がうれしいですが」

おいおいアイカさん、さっきめっちゃ無理矢理食べさせようとし

てたじゃないか。

「というか、何もナイフとフォーク構えなくてもよかったんじゃないか……。」

後々聞いたところによると、元々子どもから大人になるにつれて嫌いな人が減っていく食べ物らしく（完全にピーマン）、今食べれずとも困ることはないだろうと思っていたとのこと。

まあ俺としては母上に答えた前者の理由が大きいんだけどね。

リミエラに情けない姿なんて見せたくない。

ぐうたらな俺を真似して育ったら世界的損失に繋がる。

「にーさま、すごい？」

「ええ、あなたのお兄様は頑張ったのよ」

「にーさま、えらいえらい」

「リミエラも頑張って好き嫌いはなくそうね」

「はいっ」

素直なリミエラはやっぱかわいいな。ここでしっかり食べておいてよかった。

きつとこれからリミエラは俺のように好き嫌いをなくすように心がけるだろう。

「それじゃありオン、これも食べるようにな」

「……え？」

父上に言われて見た皿には、焼き芋虫的なものがたくさん乗っていた。

焼き芋じゃないよ？芋虫だよ？

無理無理無理無理、マジ無理だって。

現代日本に住んでた俺にその仕打ちは酷いってもんですよお父様。

「も……もう少し時間をください……」

当然のように心が折れて謝ると、父上と母上、アイカさんに笑われてしまった。

さっきは笑ってごめん、俺。やっぱり俺は弱い子です。お子様でした。

というかある意味平然と芋虫食べてなくて良かった。

その後食事を終え（芋虫は食べる勇気が湧かなかった）、記憶を頼りに自室へと向かった。

第1話 5歳の少年（後書き）

誤字脱字・感想などありましたら気軽に伝えてください。

第2話 自覚無自覚

途中何度か迷った拳句に（いや思ってたよりも広いんだよこの家）、
ようやく自室へと辿り着いた俺。

正直自分の部屋って感じはまだしないけど、これから使っていく
うちに慣れていくだろう。

とりあえず1人になってこれからのことを考えたかった。

まずは行動面。

先ほどの行動、急な変化という風に取りられなかっただろうか。
さすがに違和感ありありの状態っていうのはまずい。

記憶をサルベージしても、自分の行動というのはあまり覚えてい
ない。

ここはおそらく意識無意識などの違いなのだろう。

例えば、自分の家族のことなど。

これはどちらかと言えば知識などの部分になり、意識することで
思い起こすことができる。

ありがたいことに会話や文字もこちらにあたるだろう。会話はス
ムーズに出来るし、文字もおそらく読める。

5歳になって急に文字が読めなくなる、とかなくて良かった。本
当に。

では自分の行動というのはどうなのか？

これはおそらく、理性で行動というのをあまりしたことがないの
だろう。印象的な部分ならぼんやりとながら思い出せるようだが、
どのように過ごしたか、何を考えていたか、といったことは殆ど思
い出せない。

あ、リミエラのことだけはやけに鮮明に思い出せるよ？俺グッジ
ヨブ。

……やめて！ キモイとか言わないで！

というか、チートなしに自分でしっかり考えて理性で行動する5歳児ってのはそれはそれで怖いと思う。

要するに、俺は自分の立ち位置やキャラ付けというのが正直よくわかっていない。

後々慣れなどの部分でどうにかなっていくんだろうが、あまりにも違うようだとかドン引きされるのが怖い。

リミエラに拒絶でもされてみる、俺は自殺するかもしれない。

たださっきの食事の際の感覚だとなんとかかなりそうな気がする。

咄嗟に丁寧語で喋ってしまったが、言葉遣いも急に丁寧になったというわけでもなさそうだし、そこそこ教育はされているんだろう。丁寧語を喋ることができる、ということも証明になっているのではないだろうか。

突っ込まれたらリミエラのために良い兄であるように心掛けたとごり押しすることにしよう。もうそれで全部許してもらえんと思いたい。本音だしね。

この世界のことをまだ何もわかっていないから確定ではないけれど、多少は異世界チートが使えるものだと思うていいだろう。

でもそれは逆に自分の身を危険にさらすことになるかもしれない。考えて使わないといけないものだ。

それで生活が楽になったり食が豊かになったりする分には全然構わないけど、変な輩が俺の生活圏に入ってくるのは困る。

そもそも俺はそこその貴族の家に生まれているわけだし、巨万の富みたいなのは別に望んでないからそういう方面の知識ってのは使わないだろう。

食に関しては少し口を出すかもしれないが、深い知識があるわけでもないし家の中でアドバイスする程度だろうな。さっきの食事も美味しかったし。ただし芋虫を除く

次に俺の能力的なものを考える。

高校生だった頃に比べて、当然のことながら色々なものが落ちて
いる。実は部屋まで来るのが少し大変だった。

しかし、前より優れているだろうことはある。

さつきはなんとなく、という言葉で片付けてしまったが、おそらく
この世界には魔法的なものが存在する。

前には感じることもなかった感覚というのが自分の中に確かに存
在するのだ。所謂魔力的なものがね。

俺の魔力（推定）の大きさが平均と比べてどうなのか、というの
はわからないが、父上や母上の力が俺よりも大きいというのはわか
る。

この部屋からでもその存在感のようなものを漠然と感じるのだ。

今の俺の感覚ではリミエラまではわからない。ちょっと……いや
かなり悔しい。

アイカさんもよくわからない。

その感覚を出来るだけ研ぎ澄まそうと集中してみると、外から父
上や母上よりも大きな力の塊を感じ取ることが出来た。

遮光カーテンを開け、森の奥の方を目で見る。

大きな魔力の塊は森の中にある湖の近くにあるようで、ぼんやり
光って見えなくもない。

なんかめっちゃ気になる。

近くに魔物の類がわらわら出てくるような場所に住んでいるとは思
えないし、森で遊んだような記憶もぼんやりとある。

そこまでの危険はないだろうと判断し、その場所へ行ってみるこ
とにした。

人間（特に子ども）って好奇心の塊だからね！

目の前に不思議なことがあると思ったら興奮してきたよ。

外に出る前に誰かに言おうと思って母上の気配を頼りに歩いて、リミエラを連れだしたとアイカさんに会ったので（途中からリミエラの気配もわかるようになった。アイカさんは多分魔力がないんだろう）、森に行ってくるよと言伝えて家を出た。

リミエラはついてきたそうにしていたが、さすがにまだ3歳の妹を連れまわしていいかどうかはわからないので今回は諦めてもらう。ほんとにめっちゃ連れて行きたいけど！

第2話 自覚無自覚（後書き）

誤字脱字・感想などありましたら気軽に伝えてください。

第3話 出会い

比較的早いとはいえ、夕食を食べ終えた後なので陽は沈みかけていて、周囲は少し薄暗い。

森の中に入ってもそれは同様というか、普通に森の方が暗いので意外と怖い。

勿論森が危険ならば母上が止めるか注意をしてくれているはずだから、そこまで大きな心配はせずに大きな力のある方へと向かっていく。

家の中で迷うくらいだし、森でも迷う気もしたけれど、魔力を感じれるならなんとかなるだろうと思ってまっすぐ進むことにした。少し進んで行ったところで父上の力が弱くなったような感覚はしたけれど、リミエラのときのように距離によって多少感じ取れる量が違うのだろうとあまり気にしなかった。

感覚で10分程度だろうか、歩いたところで力を強く感じる湖が見えてくる。

結構遠く感じるかもしれないが、子どもの足で10分といったところなので実際はそこまででもないのだろう。

まあ十分と言える程度には広いとは思うけど。

澄みきっているお陰か、陽が沈み暗くなっているもその湖はよく見えた。

その水面は月の光を反射し、なんとも幻想的な雰囲気を感じさせる。

今気付いたがこの世界には月が2つあるようだ。

大きな赤い月に寄りそうようにして小さな青い月がある。

当然満ち欠けはするのだろうが、今日この日は満月のように思え

た。

「——綺麗だ」

これは勿論、2つの月の光を反射するこの光景を目にしての感想でもあるが、俺はむしろその中央に雄々しく水浴びをしている獣を見てそう思った。

——白狐。

それはまるで水面に立つかの如くそこに居た。

5本の尾を巧みに使い、自らを清めるように水を浴びている。

まるでおとぎ話の世界だと呆然と見詰めていると、それは悠然とこちらを向いた。

『その、我になにか用か？』

「っ!？」

あまりにも唐突なその言葉。

俺はまず、俺が近づいてきたのはわかってるのだ、という風にゆっくりと振り向いた様に驚き、そして言葉を喋るということに再び驚いた。

「喋ってる……!」

『全く失礼な事を言うものだ。見てわからぬのか？ これでも我は妖狐なのだな』

「あっ……」

思わず呟いた俺の言葉に、その白い狐はくすりと笑うように応える。

妖狐は喋ることが出来る、というのは常識なのだろうか。

とすると実は今のつて意外と危ないセリフだったんじゃないか？
もし気が短かったらアウトだった。
と恐々としていると少し遠くを見るように、

『ぬしには害意は無いようだし、気にしてはいないよ』

と再び喋りかけてくる。

「……え？　もしかして心が読めるの？」

『すべて、ではないがな。強く思ったことなら多少はわかるぞ』

まるですべてを見通されているような、そんな錯覚に囚われ大きな不安を感じるがそれを察し、湖の中央からこちらへと向かいながら一言付け加えてくれる。

向こうに気遣いまでされてしまった。

こうなると相手の方が上手なのだと開きなおる事が出来る。

思うがまま喋ることにしよう。

「僕はリオン。リオンとケイリオ。この森の近くの家に住んでる」

『知っておるよ。その屋敷だろう』

「うん」

『我は長いことこの森に住んでいるからな。しかし今日はどうしたのだ？』

「どうした……って？」

『ぬしはこの近くに来ることはあれども昼間であつたり、1人ではなかったりしたと思うのだが』

「わかるの？」

『それでも気配を感じることは長けている故な』

「そうなんだ」

やはり森の主（暫定）ともなるとそんなことは朝飯前、ということなのだろう。

さっきの様子からも気配を悟ることは出来るのだと思っていたが、まさか覚えられているとは思わなかった。……例え覚えていないことであつても。

『そして今日は迷うことなく真っ直ぐここへ向かつて来た。不思議なものよな』

「？」

『まるで我がここにいますということがわかるようになったかの様な、その様な感じがする』

「っ！？」

『なるほど、そういうことか』

これは少し反省しなければならぬかもしれない。

この白狐はつまり、こう言っているのだ。——今までとは違った行動をしている、と。

そして前世の記憶を思い出す前の俺には魔力を感じる力が無かったということがわかった。

これは2通りの考え方があっていいだろう。

1つは精神年齢が上がったため、魔力というものを認識し理解できるようになった可能性。つまりは例外的ではあるものの成長の一部。

そしてもう1つは、魔力のない世界から意識を移したため、自らの魔力を認識する過程で他の力も感じ取れるようになった可能性。俺としてはこちらだと踏んでいる。

ここまで大きな力を持った獣がいるにも関わらず、1人で森へと向かうことを母上が許したことからそう考えている。

勿論、この狐が両親の知り合いで害のない者と知っているという可能性もある。

「前から僕のことを知ってたの？」

『我はぬしが生まれるより前からここにいたのだ。幼子が生まれたら人の気配が増えるし、ぬしがこの森へ来たときもあまり驚かせぬようにと少し離れるくらいのことはしていた』

「うーん……少し求めてた答えとは違うんだけど、いいや。驚かせるってことは君みたいな大きな力を持った獣っていうのは珍しいの？」

『我は妖狐の中ではまだそれほど大きな力を持っているわけではないが、確かに人よりは大きな力を持っているな。我の様な者はあまり人前に姿を見せぬだけでそれなりにいる』

「妖狐っていうのが有名なくらいにはってこと？じゃあ君はなんでこんな人のいる場所の近くに住んでるの？」

『単にこの地が好きただだよ。それに主ら以外の人は森にはあまり近寄らぬ。人の多く住む地はここから少し離れるからの』

「そっか。もしかして迷惑だったかな？」

『いや、そうでもないな。ぬしからは邪気を感じなかったのだから、姿を隠さずともよいと思ったのだ』

「気？」

『澱みなく力強い気、という感じかの』

「何も考えてないってことなのかな……？」

確かに少し精神年齢が下がったのかもしれない。肉体につられたのか？

現状を確認していたはずが、気になることがあったせいで本能のままここまで来てしまったから。まるで子どもじゃないか。

いや確かに子どもではあるんだけど。

『ぬしは我に真っ直ぐ近づいてきた故、我が離れても追ってきそうな気がしたというのもあるがな』

「……あり得る」

否定できない自分に、少しだけ悲しくなった。

今の俺はやっぱり子どもなんだな。

こうなるともう、ある程度は自分の思うままやってみていいように感じた。

そもそも、前世の記憶があるとはいえどこからどう見ても子どもなわけだから子どもらしくするのは悪いことではないはずだ。

さつき注意されたばかりだしね。

しつかりやろう。いや演ろう。

『ぬしからは少し、不思議な雰囲気を感じるよ。とても子どもとは思えぬ』

「あんまり心を読まないでくれると会話がしやすいんだけど」

『先ほども言ったが、そこまでわかるわけではないよ。今のはせいぜい気持ちを切り替えた、という程度だな』

「まあ間違いではないね」

『勿論ぬしの様子からもわかることではあるがな』

「そんなにわかりやすいかな……」

『我は心の動きがわかるから余計に、というのはあるかもしれんな』
「すごいね」

『ほう……。ぬしは珍しいの』

「……？ 何が？」

『多少とはいえども心を読まれるということに嫌悪感はないのか？』

「正直に思ったことを喋ればいいだけでしょ？別に普通なんじゃないかな」

『なるほど、普通。か』

「別に心を読まれたからって死ぬわけじゃないしね」

『……………』

俺がそう言つと、白狐は急に黙ってしまった。

何かまずいことでも言つたんだろうか。

元々出会いの段階で全面降伏してたから、今更心を読まれたところかどうかということはない。

さすがに考えていることすべてを読まれたらどうだかわからないが、こうやって落ち着いている分にはあまり伝わらないようだし、さっきまでも殆ど素のまま対応していたためそれこそ今更って話だ。

第3話 出会い（後書き）

誤字脱字・感想などありましたら気軽に伝えてください。

第4話 契約

『ぬしはなかなか大物なのかもしれんの』

「そうかな。なんだか何も考えてないただの考えなしって言葉に聞こえなくもないけど」

『はははっ。まあ一応褒め言葉と受け取ってもらいたいものだな。ぬしがただの考えなしなどではないということはわかっておるよ』

「……そういうときだけ、ずるいと思うな」

『…………… 久方ぶりに人と共に在るのも良いかもしれぬな』

「……え？」

『坊、リオンと言ったな。近う寄れ』

「あ、うん……」

白狐は有無を言わさぬ態度で（要するに強制）、俺を近くに呼んだ。

これってイベント的なやつなんじゃなからうか。

RPG系はよくわからないけど、さすがにここで首を切られるなんてことにはならないだろう。

『右手を出せ』

「……はい」

『ふっ……。しかと齒を食いしばれよ？坊』

「……………え？」

はつきり言っで、白狐のその楽しむような表情（舌なめずりしてた）から、これから辛いことが起こるだろうことは目に見えていた。しかしながら、この時点で俺にはそれを回避することなど到底不可能なことだった。

「もう……お嫁に行けない……」

『全く、坊は男児だろうに』

ごめん、間違えた。

白狐も呆れてるよ。いやでもお前のせいなんだからね！？

『わかっておるよ。すまぬな、坊。しかしこれは必要なことだったのだ』

「もういいよ……。なんかもう……いいよ……」

『坊、指を見るといい』

「……………」

涙目&超ローテンションのまま噛みつかれた中指を見てみると、そこには黒い模様が描かれていた。その模様はどう見ても狐だ。5本の尾を持つ狐の姿だ。

つまり……どうということ？

『我は坊の生きている限りその身を護り、力を坊のためだけに揮うことを誓おう』

「……ごめん、なんて？」

ここまできて未だに事態を理解出来ない俺。痛み（もうひいてるからただの幻想）のせいで完全においてかれた感がやばいね！

『つまりは我は坊と共に生きよう、ということだ。友である証とでも捉えておけばよい』

「そっか。まあ友だちならいいや。はいはいよろしくね」

『む……。少々ぞんざいではないか？ 坊』

割と大事なことを言われた気もしないでもないが、俺は今幻想の痛みと闘っているのだ。正直どうでもいい。

まあでも言いたいことはなんとなくわかったよ。寂しいから一緒に遊ぼうぜ？　ってことだろ？　大丈夫わかってるよ。

……え？　違う？　いや似たようなもんでしょ。……………たぶん。

『ちなみに、今は我が坊の契約獣となるための儀式で痛みや傷はすべてまやかしてしかないぞ。まあ今の坊などではそう簡単に振り払えるものではないがな』

「ちよつ！　え？」

はっはっはっ！　と豪快に笑った白狐から驚きの言葉が発せられたような気がする。

何それ？　あの意味わからん痛みがただの幻？　つまり今の俺は幻想の幻想と闘ってるの？

……ただの間抜けじゃないですか。何それひどい。

『ふむ……先ほどもそうであつたが、それが坊の素の姿なのだな。我の前では無理せずともよいぞ』

「素……ってわかるの？」

『坊の契約獣と成った我は坊と半分繋がっているようなものだ。坊の気持ちくらいならば前より鮮明にわかる』

「なにそれずるい」

『まあ良いではないか。坊も随分と大きな隠し事をしていたようだし。全く坊は我を楽しませる天才だな』

「……………」

ですよねー。そうなっちゃいますよねー。

要するに、だ。この白狐は俺が転生者だと理解した、ということなのだろう。

今日1日で散々な目にあったが、まあ良き理解者が得られたという事でチャラにしようそうしよう。じゃないと俺の心折れそうですマジで。

『……………友の我にくらいは、臆することなくなんでも話すといいさ』

「友だち……………。うんそうだよな。お前は僕の初めての友だちだ。これから、よろしく」

『ああ』

握手でも、と思ったけれど、出来そうな感じはしなかった。というかこの世界に握手の文化があるのかがまずわからない。俺たちは共に目を合わせ一言交わすと、共に家へと戻り始めた。まるでずっと昔から一緒に居たかのように喋りながら。

「それよりさ、その体どうにかならない？さすがに驚かせちゃいそうなんだけど。というか妹を泣かせたら……………殺すよ？」

『友に言う言葉ではないだろうに……………。まあ坊が望むのならば姿を小さくすることなら出来るぞ』

「そっか、良かった。というか僕にはちゃんとリオンって名前があるんだけど」

『はっ！ 坊はまだまだ未熟故、坊で十分すぎるわ』

「くそっ……………見てろよ……………」

『坊も多少は崩れたとはいえあまり本来の話し方ではないように思うぞ。我に失礼だとは思わぬのか』

「……………それはいいんだよ。僕は決めたんだから」

『そうか』

「うん」

もうこの際だから、徹底的に演ろうと。

よく聞くといい、俺。俺は……、僕は、リオン。リオン＝ケイリス。

それが白狐を友に持つ者の名前だ。

この地に生を受けた僕のただ1つの名前だ。

「君の名前も考えなきゃね」

『ふむ……名というものにはあまり興味はなかったのだが、坊が我に名を捧げるといふのなら聞いてやらぬこともないぞ』

「……えらそうに。言ってる」

手のひらサイズにまで小さくなった白狐を頭に乗せ、すっかり暗くなってしまった道をゆつくりと歩いて往く。
ふと思いついた疑問を投げかけてみる。

「ねえ、この刻印？　って黒いよね」

『それがどうかしたかの？』

「いや白狐なのに黒いつてなんか違和感あるよね」

『契約自体が人の身に証を刻むものだから。隠れてしまっではあまり意味がない』

「そついうものなんだ」

『そもそも我は白狐ではないぞ』

「……え？」

『今はまだ成長途中故毛が白いが、毛はいずれ金へと近づくはずだ』

「それって尾も9本になったりする？」

『そのはずだの』

「……もうほんと、なんでもいいや」

『投げやりなのは気に食わんの……』

結論。異世界で初めて出来た友たちは九尾の妖狐様でした。
もう驚かないぞ！　……………たぶん。

第4話 契約（後書き）

誤字脱字・感想などありましたら気軽にお伝えください。

10/7 ご指摘がありましたので1文削除しました。中身に影響はありません。

10/9 設定見直しに伴い、契約聖獣↓契約獣とに変更しました
11/3 ご指摘がありましたので修正を行いました。

第5話 ペット（笑）とかわいい妹（前書き）

作った順に投下したので投稿順は6話↓5話となっていました
が。

申し訳ありません。

第5話 ペット（笑）とかわいい妹

白狐（ほんとと違うけど）の名前はタマにした。

雌だったら九尾の狐ってことでタマモにしようと思ったんだけど、聞いてみたところ雄だったので最後のモを消しただけだ。

いや違うよ？

べべべ別にいいようにやられて悔しかったからペットみたいな名前にしてやろうとか、そんなこと全然思っていないよ？

ほ、ほんとだからね？

そんなこんなで家まで帰って来た。

タマは僕の頭の上で丸くなって眠っている。なんともいい御身分なことだ。

威厳も何もない名前を付けられたことを知らずに呑気な奴だ。ふふふ……。

ただ、これから僕は1つの問題に取り組まねばならない。定番のあれですよあれ。

この子、飼ってもいい？

ダメだ！ 捨ててきなさい！
ってやつね。

くそっ……こいつが呑気に寝てるのが気に食わない。

ほんといい御身分だな！

「た、ただいま帰りました……」

「あら、お帰りなさい。どうしたの？」

「あ……あの……森で拾って……」

「そっ……。アイカ、レドを呼んできて」

「はい。少々お待ちください」

うお！？　びっくりした。

アイカさんは魔力がかなり少ないから、気配が少しわかりにくいのだ。

タマと契約してから力がかなり上がったようで、今ではリミエラが遠くに居てもわかる。超うれしい！

きちんと探れば、アイカさんや他の使用人さんたちの場所もなんとなくわかるから、これは多分魔力というより気配察知の方に長けているのだろう。

タマは獣だし、気配探るの得意だって言ってたからね。

それに僕の魔力探知みたいな力が合わさって、魔力を持つ人が鮮明にわかるようになったのだと思う。

「よ、呼んだか？」

「ええ。リオンが少し話したいことがあるそうよ」

「そ、そうか。それで、どうした、リオン」

「はい。実は……」

何故だか少し挙動不審な父上が僕の話聞いてくれる。
というか母上は凄いな！

あれだけで察してくれたのか。

森で出会った経緯を（作り話を適当に混ぜながら）話す。

最後の方は全部ウソだ。

というか契約獣とかったのが未だによくわかってないからごまかしてるだけなんだけど。

タマとの契約つてのが悪魔に魂を売り渡した、みたいな感じの事だったら困るし。

なんとか話の辻褄を合せながら、家におきたいと懇願する。

「……信じられんな」

「ち、父上……」

「ああいや、そういうことではないのだ。心配するな」

「では……？」

「きちんと世話はするのだぞ？」

「わかっています。ありがとうございます」

父上は1度、怪訝そうな顔をしたが許可をくださった。

その間、タマは1度も起きなかった。

……………ぶん殴りたい。

タマと出会ってから数日、僕はある作業をしていた。

なんでもタマの話によると、あの森や湖に魔物が少ないのはタマがいたかららしい。

魔物がいることにはあまり驚かなかった。タマとか規格外だし。

タマの気配があるからその辺の弱い魔物は寄り付かなく、強い魔物はタマと同じように自分の住処を持っているから元々近づいてくることはあまりないのだとか。

だから、タマの毛を数本まとめて縛り、地面に埋めたり木に結んだりすることで結界みたいなものを作るようにと言われた。

夜はタマの毛をむしり（ちよつと恨みを込めるのがポイント）、数本毎にまとめ縛る作業。

昼間は時間が空いたところでタマと一緒に森へ入り、タマの言うように毛を配置していく。

移動時はタマに乗っている。さすがに森を歩き回るような体力はまだない。

これが結界代わりになるのだと聞き、思ったことを聞いてみる。

「これって人が持っても魔物避けになる？」

『ああ、なるぞ。リミエラ嬢に持たせるのか？』

「うん。万一にでもリミエラが1人で迷子にでもなつて、魔物に襲われたら困るからね」

『過保護な奴め……』

「心配しすぎて困ることなんてないだろ」

『まあいいがの。それに我の毛を持っていれば自然と力も付くであろっ』

「どういうこと？」

『幼き頃より強い魔力に触れていれば、魔力がつくのも早く、成長も早い。常識じゃ』

「常識とか知らないよ……。なら僕も持ってた方がいい？」

『坊はそもそも我と共に在る故、わざわざ持つている必要などない』
「まあそうか。でもいいこと聞いたな」

これでリミエラに毛を持たせる理由が増えたわけだ。

いつもいつも僕が守つてあげられるとは限らないし、リミエラの力が増すのはいいことだよね。

今日の分のノルマ（毎日最低でも10か所はまわっている）を終え、家に帰ってくる。

「ただいま帰りました」

「あら、お帰りなさい。今日も森へ行つたの？」

「はい」

「やつぱり男の子なのね。楽しい？」

「いえ、そこまでは……」

「そうなの？」

母上はくすりと笑みを浮かべる。

別に遊びに行つてゐるわけじゃないから楽しくはないんだよね……。かなり広い範囲をまわつてゐるし。

「そういえば、今日リミエラが寂しそうにしていたわよ」

「本当ですか？」

「リオンはこのところ森へばかり行っているから、あまり構ってあげてないのではないかしら？」

「そうですね……。もう少ししたら時間も取れると思いますが」

「ふふっ……。多分今日にでもせがませるわ。相手をしてあげなさい」

「そうでしょうか？わかりました」

どうやらリミエラに寂しい思いをさせてしまったようだ。

出来るだけ早くタマの用を済ませないといけないな。

どうでもいいけど、僕が帰る時って母上は絶対居間にいるよな。

別にいつも居るわけじゃないはずなのに……。

僕为天敵である焼き芋虫にむざむざ敗北した夕食の後、母上の言った通りにリミエラに遊んでくれとせがまれた。

上目遣いでせがまれたら断ることなんて出来るはずがない。僕の妹、超かわいい。

夕食時に細かく刻まれたピーマンを涙目で食べてる姿はやばかった。悶死する。

部屋に来たリミエラに日本のお伽噺をいくつか簡単に聞かせる。異世界チートあってよかった！

タマは途中でどこかへ行ってしまった。

ふとリミエラが眠そうにしていることに気付いた。

まだまだ子どもだから、疲れが出てしまったんだろう。

僕が眠らないと寝ないとかわいいわがママを言ったので、今日の作業は諦め明日の朝早めに起きてリミエラの護身具(?)を作ろうと思う。

リミエラに嘘をつくことになってしまったので、部屋に帰したあと

すぐにベッドに入った。

とは言ってもまだ少し早い時間だったため、さすがにすぐは眠りにつけない。

頑張つて眠ろうとしていると、部屋の外からリミエラの気配がした。

どうしたのだろう？　と思い、起きて扉を開けようかとしたところでリミエラが部屋に入ってきた。

なんとなく起きるタイミングを失い、リミエラが近づいてくるのを待つ。

リミエラは少し周りを見回すようにした後、ベッドにもぐりこんできた。

きつと寂しかったのだろう。謝りの意味も込めて安心できるように軽く抱きしめ、一緒に眠った。

翌朝、タマが戻ってきたことで僕は目を覚ます。

「どうしたの？」

『いや、リミエラ嬢は私の事が気に食わぬようだな。少し出ていたのだよ』

「気に食わない？　なんで？」

『大方、我が坊を連れまわすから嫉妬したのである』

「そっか。リミエラには悪いことしちゃったかな」

『出来るだけ早く終わらせるため、夜のうちに在る程度下見をしておいた。あと数日で終わるだろう』

「ありがと。とりあえず僕はリミエラの護身具を作るね。毛、貰うよ？」

『ああ。好きにするといい』

そういうとタマは元の姿に戻る。僕はそこから適度な量の毛を貰

う。

それを使い少し余裕を持たせた小さめの腕輪を作る。これなら手に付けるだけでいいし、持ち運びやすいだろう。

そのまま今日使う分の毛を縛っていく。大体それが終わるころにタマが声をかけてきた。

『リミエラ嬢が起きるようだ』

「わかるの？　じゃあ小さくなくてももらえるかな？　あと、喋らないようにね」

『わかっておるよ』

まあ頭の中に直接話しかけてる感じらしいから、喋ったところで僕以外に聞こえないようにすることは出来るみたいなんだけど。

タマが小さくなると、リミエラがベッドから素早く起きる気配がした。

起きたら僕がいなかったから不安だったのかもしれない。

くすりと笑うとリミエラに声をかけた。

そして腕輪をつけてあげる。その時少し拒絶する感じがしたが、タマは悪いやつではないのだと諭し、軽く抱きしめた。かわいい。

「それじゃあ、朝食を食べに行こうか」

「はい！」

このかわいい妹を守るために、少しでも早くお仕事を終わらせようと思った。

第5話 ペット（笑）とかわいい妹（後書き）

誤字脱字・感想などなどありましたら気軽に伝えてください。

10/7 2行目一部修正しました。

10/9 設定の見直しに伴い一部変更しました。また、夕食時の描写忘れのため追記しました。

第6話 にーさまのじょうず（リミエラ）（前書き）

リミエラ視点なので全部ひらがなで書いてます。
はつきり言って読みにくいです。ごめんなさい。

第6話 にーさまのじょうず（リミリン）

さいきんのにーさまはすこしへんです。

あの“たま”というどうぶつをひろってきてから、わたしにないしよでおそとへでかけているようです。

いままではおそとへでかけるときはおかーさまとわたしと、たまにおとーさまといっしょだったのです。

おうちにいるときもにーさまはわたしにまいにちはなしかけてくれていました。

それなのに“たま”がおうちにきてからにーさまはへやにこもってしまったり、いつのまにかいなくなっていたりと、おしょくじいがいであわなひもふえてしまいました。

そのことをおかーさまにいうと、「にーさまはおとこのこなのよ」といつものえみをうかべてこたえてくださいます。よくいみがわかりません。

なのでわたしはかんがえました。

きつとにーさまは“たま”にとりつかれているのだと。

“たま”にとりつかれたにーさまは、わたしがとりつかれないようにしているのだと。

それならばかんたんです。わたしが“たま”をやっつければいいのです。

それからわたしは“たま”をかんさつしました。

“たま”はにーさまといつもいっしょなので、わたしがにーさまとあうときにはかならず“たま”がにーさまのあたまかたにのっています。

にーさまがおひとりのときも、はなれません。

やはり“たま”はにーさまにとりついてにちがいありません。にーさまといっしょのときには、“たま”がにーさまをたてにす

るかもしれませんが。それはこまってしまします。

どうすればにーさまにきづかれずに“たま”をおそえるのか、おかーさまにきいてみることにしました。

「どうしたらにーさまをおそえますか？」

「そうね、にーさまがねむったときにおへやにしのびこむのがいいんじゃないかしら」

「わかりました。がんばります」

さすがはおかーさまです。わたしのぎもんにすぐこたえてくださいました。

なんだかいつもよりもやさしくほほえんでいるようにかんじましたが、わたしとにーさまにとっては大いじなことなのです。わらってらばあいではないのです。

わたしはおかーさまにたのんで、おひるねのじかんをいつもよりながくしてもらうことにしました。

おひるねのじかんがながければ、にーさまがねむるまえにわたしがねむってしまうことがなくなるはずです。“たま”なんかけちらしてくれます！

いつもよりもおそくにおきたわたしは、いつものようにゆうしよくをたべました。

ゆうしよくはりょうりにんの“ろん”さんとおせわがかりの“あいか”さんがつくつてくれます。

とてもおいしかったです。

でもやつぱり“ぴーまん”はきらいです。

にーさまはすこしまえからきにせずたべています。

これも“たま”がきてからです。

やはりにーさまは“たま”のせいでかわってしまわれたのでしょう。

ですがにーさまも“いもむし”だけはのこされていました。
かわっていないことにすこしあんしんしました。

ゆうしょくがおわると、にーさまがおへやにもどろうとしていた
のでわたしもあわてておいかけます。

「にーさま、まってくださいー！」

「りみえら、どうしたの？あんまりあわてるとあぶないよ？」

「だいじょうぶです。それよりにーさま、このあといつしよにあそ
んでもらえませんか？」

「あー……うん。いいよ。あとでぼくのへやにおいで」

「はいー！」

なんとかにーさまとあそぶやくそくをすることができました。

これににーさまをつかれさせて、はやくねむってもらっさくせん
です。

かんぺきなさくせんです。さすがわたし！

そのあとにーさまのおへやにいったわたしは、にーさまといっし
よにあそんでもらいました。

にーさまのおはなしはとてもおもしろいです。

どれもきいたことのないおはなしばかりなので、もしかしたらに
ーさまがつくったのかもしれない。さすがはにーさま、すごいで
す。

おはなしをきいているうちに、だんだんとねむくなってきてしま
いました。

「りみえら、もうおそいからおへやでねむろうか」

「……ん」

……は！？ わたしはなにをしているのでしょうか。
このままではけいかくがしっぱいしてしまいます。

「に、にーさまがねむるまでわたしもねむりません！」

「わかった。ぼくもねむるから、りみえらはおへやにもどろうね」
「はい」

わたしはにーさまがねむってくれるようになる“じゅもん”をと
なえました。

にーさまのおへやにくるまえに、おかーさまにおしえてもらった
ものです。

わたしがどうしてもねむくなってしまうたらこついいなさいとい
われたのです。

いちどおへやにもどり、もういちどにーさまのおへやにむかいま
す。

とちゅうでおかーさまにおあいしたので、おれいをいいました。
まっけてください、にーさま。

わたしが“たま”からすくってみせます。

にーさまのおへやのとびらを、おとがでないようにあけます。

にーさまのべっどはおへやのひだりがわ。

“たま”はいつもべっどのうえ、にーさまのあしもとでねむって
いるのです。

あれ？

おかしいです。

いつも“たま”がいるはずのばしょにはなにもいないのです。

にーさまはべっどですやすやねむっておられます。

わかりました！

“たま”はわたしがおそろしくてにげたのです！
きつとそうにちがいありません。

そうおもったらあんしんして、ねむくなつてきてしまいました。
おもわずにーさまのべつどもぐりこんでしまいました。
いいですよ？ にーさまを“たま”からまもったごほうびです。
べつどにはいつてすこしすると、にーさまがわたしをだきかかえてくれました。

にーさまはあたたかくて、すぐにねむることができました。

つぎのひのあさ、めがさめるとにーさまがみあたりませんでした。
あわてておきると、にーさまはつくえでなにかをしているようでした。

そのよこには“たま”もいます。

“たま”はにげたのではなかったのでしょうか！？

にーさまにこえをかけようとべつどからでます。

「りみえら、おはよう」

「おはようございます。にーさま」

「きょうはりみえらにぶれぜんとがあるんだ。てをだしてーらん」
「なんですか？」

にーさまはわたしにそういうと、ひだりてくびになにかをまきつけました。

それをつけるとなんだかちからがわいたような、ふしぎなかんじがしました。

すごくきれいなしろいろをしたそれは、なんともしんぴてきでした。

「これはなんですか？」

「“たま”のけでつくったおももりだよ」

「！ー！」

「だいじょうぶ。“たま”はわるいやつじゃないから。それはりみえらをきつとまもってくれるよ。あんしんして」

「はい……」

にーさまはそういうとわたしをだきしめてくれました。
なんということでしょう。

にーさまはわたしのかんがえていることなどおみとおしだったのです。

そのうえでこれをぶれぜんとしてくれたのならば、きっと“たま”
“はいやつなのでしよう。”

いつもいつもにーさまのおそばにいるのはきにくいませんが、そこはみとめてあげます。

「それじゃあ、ちょうしよくをたべにいこうか」
「はい！」

にーさまはやっぱりわたしのにーさまでした。

第6話 にーさまのごようす（リミエラ）（後書き）

誤字脱字・感想などありましたら気軽に伝えてください。

10 / 7 誤字がありましたので修正しました。

11 / 3 同じく誤字がありましたので修正しました。

第7話 息子と妻と契約と（レドリック）（前書き）

父親視点となっております。
契約についての解説を少々。

本編で解説しにくい固有表現がありましたので、読まなくてもなんとなくわかっていただける程度ではあると思いますが、簡単な解説を設定資料に載せました。

第7話 息子と妻と契約と（レドリック）

夕食時の、息子の成長をほほえましく思っていた私は、ソフィアからの“通信”を受け、気配を隠す“隠密”のスキルを使用しリオンを追っていた。

森で何かあった場合にリオンを守るように、と。

少し距離を置きながらリオンの後ろをついていく。

まるで何かに導かれるかの様に真っ直ぐ進むその姿はある意味異常とも言えた。

リオンは時折、その行く手を木に阻まれて数歩回り道とも言えぬ回り道をする以外は道無き道を進み、知るはずの無い森の奥へとその歩を進めていく。

森の中に湖があることは、私やソフィア、使用人たちなどは当然知っていたが、少々遠い場所にあるため未だにリオンやリミエラを連れていったことはなかったのだ。

今回リオンが10分少しという短い時間で着いたのは、ここまで殆ど一直線に向かったからだ。普通に道なりに進んで行くのならば倍の時間はかかる。

——その場所で見た、その美しい姿は、まるで物語に出てくるかと思っほどのものだった。

ただその場にいるだけで、力の強い獣だと理解させられるほどの威圧感を持った白い狐。

リオンも思わず見とれているようだった。

さも当然とばかりに振り向きリオンを見つめる獣。

気付かれたことに驚いたのか、リオンが少し大きめの反応をみせる。

そこで私は、とても敵うとは思えないのだが、何かあった場合に

はすぐに出て身を犠牲にしてもリオンを守ろうと気を新たにする。

「喋ってる……！」

リオンが思わず漏らした言葉。

その言葉の意味が一瞬、私にはわからなかった。

しかしそれはほんの一瞬のことだけで、すぐに理解させられることになる。

『そのの、あまり敵意を向けるものではない。心配せずともこの子に害は与えぬよ』

「っ！？」

唐突に紡がれた言葉。

頭の中に直接語りかけられたであろうその言葉は、すぐに白い狐の言葉なのだと理解する。

それだけの魔力を有している獣が、何故このような場所にいるのだろうか。

妻のソフィアも似た特殊スキルユニークを持つてはいるものの、それは身内といった限られた相手にしか対応できない。

先ほどのリオンの反応からも、この白い狐の力がその程度に収まるものではないとわかる。

『ぬしが居ては気が休まぬな。少し離れてくれぬか』
「ぐっ………！」

白い狐がそう言うと、大きな力が私に襲いかかった。
立っているだけで逃げ出したくなるようなその力は、私の戦意を落とすのには十分すぎるほどだった。

『先ほども言ったが心配するな。ソフィアの親族に危害など加えぬ。立ち去れ』

「……………！！！」

まるで射殺するような視線を向けられると、すぐに立っていられなくなる。

本当ならば今すぐにでもリオンを連れ戻したいところなのだが、前に進もうとすればするほど力が抜けていく状態ではとてもではないが盾にすらなりそうにもなかった。

白い狐が気になることを言っていたこともあり、私はすぐに屋敷へ戻った。

私はソフィアを見つけると、思わず叫んでしまう。

「ソフィア！」

「そんなに慌てて……………どうかしましたか？」

「リオンが！ 湖に！ 狐が！」

「……………意味がわかりませんよ。もう少し丁寧に喋ってください」「ぐっ……………すまない」

リミエラを寝かせたばかりなのに……………と呟く妻に諭され、一度深く呼吸をする。

「実は……………」

そう言って森の奥の湖であったことを話す。
終始無言で聞いていたソフィアは少しため息をついた後、考えるように目を閉じた。

「あの子が……ね。なんとなくそんな気配はしていたけれど。全く困った子」

遠い目をするソフィアの言葉は、“子”という言葉がリオンを指すのではないことを私に気付かせる程度の力がこもっていた。

「まあ心配しなくても多分大丈夫よ。もしかしたら連れて帰ってくるかもしれないわね」

「連れて……というのはリオンがあの子狐を、ということか？」
「そう。少しだけ昔のことを話しましょう」

そこから聞かされた話は、まとめると大体このような話だった。なんでも、ソフィアは小さな頃に白い子狐を拾い世話をしていたのだとか。

その狐にはあまり力が無く、生きていくのすら難しいほど衰弱していたという。

家に連れ帰った後、懸命に世話をしなんとか回復したところで話しかけられた。

子狐は比較的最近生まれたばかりの妖狐で、いずれは強い獣となるのだと。

それを聞いたソフィアは特になんとも思わずにそのまま世話を続けたらしい。そもそもそれを聞いて理解出来るほど成長していなかったとも言っていた。

1年も経たないうちにある程度の大きさまで成長し、尾を増やした狐はソフィアに感謝をして自分の身を少し削り、力を与え、姿を消した。

それがソフィアの持つユニーク、“通信”と“搜索”ということらしい。

「まあ当時は私もその狐も力が弱かったから、“通信”も“搜索”

も身内にしか使えないし、“搜索”はなんとなく気配がする、という程度でしかないのですけど」

「そうだったのか……」

その後ソフィアは、リオンが戻ってきたようね、と言うと居間へと降りていった。

少しするとアイカが私を呼びに来る。

リオンの頭の上に乗っている小さな獣の姿を見て、少し恐怖が蘇るが、リオンの話をしっかりと聞く。

それは俄かには信じがたい話だった。

契約というのは（一族に契約しているなどといった一部の例外を除き）自分よりも力の弱い獣や精霊とするものだ。

そのため契約獣や契約精霊というのは世間では使役獣、使役精霊と呼ばれる。

自分よりも力の強い獣や精霊は、基本的に下位の者に従わない。

自らの力に誇りを持っている場合、最悪の場合は契約後に殺されてしまうこともある。

また、一般的には獣よりも精霊の方が力は大きい。

ただし契約獣、契約精霊というものを持つとその得意なことがある程度自らの身につくため、剣士や傭兵といった近接職は契約獣の方を好む。つまりは力の強い方が必ずしも良いとは限らない、ということだ。

つまりは、リオンはまだ力が付ききっていないため、私を威圧するほど圧倒的な力を持った妖狐と契約出来るとはとも思えないのだ。

しかしリオンが必死に隠そうとしている右手に見える刻印が、その事実を物語っている。

契約刻印というのは、契約するものにより刻み方や刻む場所が異

なる。この狐は右手を選んだ、ということなのだろう。

右手が表す意味は“未来”。その中指に刻まれた刻印は、未来永劫友である、という意味になる。

殆どの使役獣、使役精霊の場合は、その身に付き従うということで小指を選ばれるのだが。

しかしながらこの場合は害があるわけでもないし、力の強い獣がリオンの身を守ってくれるというのならそれこそ歓迎すべきことなのだ。

そう思い、私はリオンに契約獣を持つことを許した。

リオンのその言い方がまるでペットのようだったので思わず変な言い方になってしまったのだが。

リオンの持った契約獣がリオンを“守る”剣であり続けることを祈ろう。

第7話 息子と妻と契約と（レドリック）（後書き）

誤字脱字・感想などなどありましたら気軽に伝えてください。

10/9 スキルについての表記を一部変更しました。また、簡単なスキルについての解説は設定資料に書かせていただきました。

11/3 誤字がありましたので修正しました。

第8話 悩み（前書き）

設定資料の”季節について” 魔法について（属性・人の属性）”
を読んでいただけると助かります。

多少の解説は本編中でしているため、読まなくても理解できないということはないと思います。

一応、設定なんて読まないぜ！という人のために、本編中でも少しずつ解説出来たらいいなと思っています。

第8話 悩み

僕がタマと出会った日（つまり前世を思い出した日）から大体ひと月ほどの時が流れた。

それが春の第2月の終わりの方だったので、今は夏の第1月後半だ。

このひと月で、ある程度の常識を身に付けた。

タマに教えてもらったり、記憶からサルベージしたり、本を読んだりして勉強したんだ。それはもう必死に。

なんでかって？ もうすぐ来るある季節が、僕の“常識”に無かったからだ。

日本では4季というのがあったわけだけど、この世界では（国柄ではなく世界中同じ気候らしい）5季になるらしい。

僕の知らないその季節は“魔の季節”と呼ばれ、簡単にいえば魔物が活性化する時期なんだとか。

タマからむしり取った毛で作った結界はこの季節を乗り切るために必要なものだったらしい。

記憶からサルベージしてきた、実感の伴わない魔の季節というのがどういふものなのかと聞いところで、ようやく知らされたことだったのだが。

まず結界を作らなければ僕の家のある森は魔物が増える。そりゃあもう、うじゃうじゃと増えるらしい。

綺麗な湖もある影響か、魔物の力の源であるマナが元々発生しやすいんだとか。

それが魔の季節になったらどうなるのか。曰く、かなりやばい。

これは僕がタマの言葉の端々に感じた雰囲気だけだね。

とりあえず危険だということがわかったので、リミエラの構ってほしいオーラを何度か、なんとか、断腸の思いで、振り切り結界作

りに勤しんだ。勿論寂しがつていることを知ってからには構ってあげることも忘れなかった。

涙目のリミエラもかわいいなとか思ってしまったのは秘密だ。

ならばこれで安全なのか、と言えばそうでもないらしい。

力の権化（？）であるタマが離れたということもあり、前よりもかなり弱く感じる結界だけではどうにもならないこともあるようだ。普段であれば問題なくても、魔の季節ならば多少の危険を冒してでも上質・大量のマナを摂りに来ようとするのだろう。

そのため早いうちから結界を作る必要があった。これは結界を森に“馴染ませる”ために必要な工程だったらしい。

その地に根付いて間もない結界はあまり大きな効果を持たず、容易く突破されてしまう。

今でも夜になると、タマは自分の力を結界に込めに行き、少しでも早く結界を強固なものにしようとしてくれている。なんともありがたい話だ。

そして僕は、いざという時のためにこのひと月、ずっと“あること”をさせられていた。

「ね……ねえ、これって本当に……役に、立つんだよね……？」

『勿論だ。坊がりミエラ嬢を守りたいと思うのなら、この辺りに湧く魔物など簡単に蹴散らせるようではな』

「でもっ……まだ僕魔法とか全然、知らない……んだけど……！」

『さすがに今年はまだ早い。我と契約したことで大幅に増えはしたものの、ぬしは魔力が成長し始めたばかり故な。これからゆっくり力をつけていかなば』

「じゃ……じゃあなんで僕はずっといたぶられてるんだよ……！」

『これが魔力を上げる最も基本的な方法だから、だの』

「それって……結局！ 今年は魔物を倒す手段に……辿り着かないってこと……！？」

『まあ仕方ないの』

「仕方なくないよ!!」

『魔物の中には、我の様に魔力をあててくる物もある。つまりこれ自体が魔物と対峙する訓練でもあるということだな』

「くっ……言いくるめられただけ、みたいで……悔しいっ……!」

かっかっかつと愉快そうに笑みを浮かべるタマは（こいつ絶対Sだ。間違いない）、そう言いながらも僕に対して魔力を放出している。

僕はそれをただ受けて、ただ立って耐えるだけ。完全に作業だ。とはいえ、ただ立っているというその行為が物凄く辛い。心折れそうになる。

今では大分ましにはなったけど、最初の頃は酷かった。生まれてきてごめんなさいレベルだった。

このゲーム（タマ的に）は、僕が倒れるまで続く。本当はすぐにも倒れたいのだが、リミエラを守るために必要と言われれば必死こいて頑張るしかない。

結局今年は間に合わないんじゃ、そこまで意味ないんじゃないかとは思っただけ。

「ぐっ!?!」

『坊、少し気を緩めただろう。我に隠し事が通用すると思うなよ』

「ちっ……!」

『その敵意をもっと耐えるということに使えぬかの……』

僕が地面に膝を付くと、やれやれ、といった雰囲気でタマは追いつちをかけてくる。ほんとにウザイことこの上ない。

一度倒れると、中々起き上がることが出来ないのがこの訓練の辛いところの1つだ。

まあ、倒れないと終わらないから始めた時点で詰んでるんだけど

さ。

暇な時間を潰すため、タマを枕にして（元の姿の大きなタマは柔らかに便利だ）疑問を投げかける。

「間に合わないんだったらさ、今年はどうするの？」

『変な事を考えるでない。我は坊の便利な道具ではないぞ』

「で、どうするの？」

『全く……。今年は、我が隔日くらいで森へ戻ろうと思っておる』

「そうなんだ」

『結界が地に馴染むのはまだ先のようなだからの』

「なんかやつてること全部空振ってるような気がするんだけど……」

『結界を張るのは早い方が良く、坊が魔力を上げていくのも決して悪いことではない。効果が出るのはまだ先になってしまうがの』

「長期戦なんだね。早く僕も魔法とか使えるようになりたいんだけど」

『坊が魔法を教わるのは早くても来年であろう。坊は春生まれだからの』

「それってなんか関係あるの？」

『大ありだな。いいか、坊。人には属性適正というものがある。普通は生まれの季節に象徴される属性魔法が適正となるためそこから扱えるようになるのが一番の近道なのだよ』

「僕は風属性が得意なこと？」

『まあ確実とは言えぬが、9割以上はそうと思って構わぬ』

ふーん、と適当に相槌を打つ。風属性を持つてるとか言われても正直あんまり実感が湧かない。ちよつと残念かもしれない、と思うけど。

こう破壊力のある魔法をばんばん使うのって、なんかあこがれない？

風属性って補助系が多いらしいし使い方とかちゃんと考えないと

宝の持ち腐れになりやすい気がするんだよね。それよりはもったわりやすい方が良かったというか。

『我と契約している坊ならば、もしかすると魔属性に目覚めることもあるかもしれないがな』

「魔属性って、大抵の魔物が持つてる属性なんだよね？」

『当然我も魔属性、ということになる』

「そっかー。魔属性ね……」

魔法書とかを読めばある程度方向性の見える基礎属性とは違い、特殊属性の扱いつていうのは難しそうだな、と思う。

特に魔属性は属性持ちが最も少ないと言われていたため、どんな魔法があるのかさっぱりわからない。

次いで少ないのが闇属性なのだが、これは快樂殺人者などの凶悪な人が後天的に持つことがたまにあるため、思っていたほど少ない。それでも他の属性より少ないことには変わりないのだが。

「迫害とか……さすがにされたくはないな……」

『奇声をあげながら魔属性魔法を街中で放ち続けるなどといった、変な行動さえしなければ大丈夫であろう』

「それ迫害されるとかそれ以前の問題だよね……」

『そもそも我が妖狐だとばれてしまえば坊は立派な“悪魔付き”ということになる。今更だ』

「確かにそうんだけどさ……」

結局タマが僕の契約獣で、妖狐であるということは早々にばれた。というか元々母上とタマが知り合い(?)だったらしく、最初からばれただった。

タマが森に住んでたのって母上がここに居たからって理由もあるのかな？

まあそれでもタマは、母上も含めて僕以外とはあんまり喋らないみたいなんだけど。

「大分動けるようになったし、帰ろうか」

『あまり遅くなるとリミエラ嬢が泣いてしまうな』

「それはそれでかわいいんだけどね」

小さくなったタマが、もはや完全に定位置となっている僕の頭の上に乗ると、少し暗くなってきたしまった森から家へと戻る道を歩く。このひと月でこの森の地理は大体把握したし、体力や筋力もこちらの正直5歳レベルではないと思う。

魔力に関しては平均がわからないからなんとも言えないんだけど。

家に帰ったら、母上と共に居間で僕を待っていたリミエラに抱きつかれた。超癒される。

その次の日、僕的に大事件が起きた。

遅くまで僕が帰るのを待っていたからなのか、リミエラが体調を崩してしまったんだ。

第8話 悩み（後書き）

誤字脱字・感想などありましたら気軽に伝えてください。

10/9 言い回しを一部変更しました。

第9話 心配（前書き）

リミエラの話を書くつもりだったのですが、これ以上書くと長くなってしまうので分割します。
一応今日中に投下予定。

第9話 心配

今後の事をタマと相談した、次の日の朝。朝食の時間。
僕は既に動揺していた。

「は……母上、リミエラはどうしたんですか……？」

「ちよつと熱を出したみたいだね。部屋で寝かせているのよ」

「ね……熱……。大丈夫なんですか？」

「まあ少しうなされているみたいだけれど、そこまで熱も高くないわ」

「そ、そうですか……。よかった」

「後で様子を見に行つてあげてね。リオンが手を握つてあげれば少しは安心すると思うわ」

「わかつています。すぐ行きます」

「ちゃんと食べてから行きなさい！ それに今は寝たばかりだから落ち着いているわ」

僕はそう言うと、朝食もそこそこにリミエラの様子を見に行こうと席を立ったのだが、すぐに母上に諭され渋々立ち止った。

寝たばかりということは部屋に入ったら起きてしまうかもしれない。僕が部屋に行ったらリミエラはもしかしたら寝ずに起きようと無理をしてしまうかもしれない。

少し時間をおいたらすぐにも部屋に行こうそうしよう。

「若様……私の作った朝食がとても食べられたものではないと、そういうことでしょうか……？」

「い、いや違うよアイカさん！ アイカさんが作ってくれる食事はいつも美味しいよ！」

「そうですか……？ 嘘じゃありませんか……？」

「アイカさんはもつと自信持ってくださいね。……いろいろと」

この家の殆ど全ての雑事をやってのけるアイカさんは、こう言うてはなんだがちょっと残念な人だ。

その容姿は整っていて、メイド服を見事に着こなしているし、仕事も出来るパーフェクトな人なんだけど、どこかずれている。いつぞやのナイフとフォーク事件なんかもわかっていただけのかもしれないが。

年齢も20代手前くらい（だと思う）とかなり若いにも関わらず、僕らの世話を毎日してくれていて、感謝の念しか湧かない。

今回は多分わかって言っているんだろうけど（そうじゃないとアイカさんの今後が本気で心配だ）、アイカさんを見事に悲しませるわけにはいかないのでゆっくりと味わって食事を済ませる。

ふと気になることがあったので聞いてみることにした。

「アイカさん、リミエラは何か食べましたか？」

「いえ……お嬢様は昨夜の夕食からずっと、水を以外口にしています」

「そっか……。ちょっと軽く食べられるものって用意出来ませんか？」

「私はこの後仕事がありまして……。ロンさんに頼んでいただけませんか？」

「ロ、ロンさん……病人食なんて作ってくれるかな……？」

「そういうところで遊ぶ人ではない、とは思いますよ……？」

「ちょっと不安、だなあ……」

ロンさんというのは所謂お抱えのコックさんだ。

僕的にちょっと苦手な人だったりする。別に悪い人じゃないし、気難しい人ってわけでもないんだけど、苦手だ。

最悪、どうにかして自分で作ろう。

食事を終え、ロンさんの“実験室”である厨房へと足を運ぶ。相変わらずよくわからないものが色々あって、カオスだ。いい体つきをした渋めの大男（目の下に隈を作って全部台無しだけど）が、僕が厨房に入ってきたことに気付き声をかけてくる。どうせ今日も徹夜したんだろう。

「お、リオ坊！ いいところに来たな！」

「いやです」

「おいおいひでえな。まだ何も言っただけじゃねえか」

「どうせ“新作”の実験台にでもしようと思ってるんでしょ？ 嫌ですよそんなの」

「今回はリオ坊も食いやすいって！ ほらいいから食ってみろ」

「んごおっ……！？」

口を無理矢理開かれ、“何か”を食べさせられる。

なんとも表現し難い味が口の中一杯に広がる。むしろ味してないんじゃないかこれ。

若干ごりごりするそれをどうにか噛み砕き、嚥下する。

微妙な後味が広がり、口の中がぱさぱさしてくる。超微妙なんだけど……。

水飲もう水。

「……今回は何を揚げたんですか？」

「ムカデだ」

「ぶううううううー！！！」

思わず口に含んだ水を吐き出してしまった。いやある意味残りを飲み込むという最悪の事態を免れたと考えられなくもない。

「む……ムカデって！」

「うまくなかったか？」

「そういう問題じゃないでしょ！ まさかこれ、普通に夕食とかに出す気だったんじゃないですよね！」

「いや、出す気だった。リオ坊にはなかなか俺の料理の良さがわかってもらえねえな」

「ムカデって毒持つてるはずなんですけど。リミエラが食べて中^{あた}つたらどうするんですか！」

「いやその辺りの下処理は完璧にやってるから大丈夫だ。そのため私物とか色々持ち込んでるしな」

「そんなところばかり力入れて……」

思わずため息をついてしまう。

僕がロンさんを苦手だと思う最大の理由が、これだ。

ロンさんは腕自体はいいんだけど、殆どの料理にオリジナリティを求める。その代表格が焼き芋虫だ。最初は芋虫を食べるのがこの世界の普通なのかと思っていたんだけど、うちだけだったらしい。他の人が使わない食材（普通は食材とは思わないものも含む）を使うことが多い、当たり外れが物凄く大きい。しかも個人レベルで芋虫なんか、実は家族には好評だ。

元々は普通に街で働いていたらしいんだけど、その自由さに職場を追い出されたところで父上が拾って来たそうだ。かなり自由にやらせてもらっているから、と父上には頭が上がりないんだとか。

腕自体はいいんだけどね……。ほんとに。

最近是完全に意表を突く料理しか作らない。しかも作ること自体が結構簡単なもの。誰でも簡単に出来る軽食やおやつ代わりとしてのものを作ろうとしているらしい。

ムカデなんか、捕まえる方が手間だと思っただけ……。

「タマは食うかな、これ」
「やめてくださいよ!」

ロンさんは笑いながら、僕の頭の上でくつろいでいるタマにムカデを食べさせようとする。

「というかタマって一応魔物だからあんまり食事とか摂らないんだけど。」

ロンさんのせいで大分脇道にそれたけど、そろそろ本題に入ろう。

「ロンさん、ちゃんとした病人食、作ってもらえませんか?」

「病人食? なんだ、嬢ちゃんが体調崩したのか?」

「ええ……。昨日の夜から何も食べてないみたいなので、起きたら少しでも食べさせないと思います」

「そうか……。わかった、すぐに作ってやるから待ってろ」

「まだ寝ていると思いますし、そこまで急がなくても平気だと思います」

「なんだ、リオ坊にしては随分落ち着いてるじゃねえか」

「さつき母上に釘をさされたばかりなので……」

僕があまり慌てているようだトリミアを不安にさせる、と。

だから少なくとも外面に関しては落ち着いてるようみせているのだ。内心は超心配だ。早く元気な顔を見たい。

最後に不安の種を取り除いておこうと思う。

「それで、ちゃんとしたものを作ってくれるんですね?」

「心配すんなって。さすがに病人の嬢ちゃんには普通の食事を作つてやるよ」

「それならいいんですけど……不安だ」

「まあリオ坊が倒れたときはどうするかわからんがな!」

「なんか……逆に安心しました。よろしくお願いします」
「任せとけて！」

今更だけど、この家には変な人しかいないのだろうか。
リミエラだけが僕の癒しだ。早くよくなってほしい。

第9話 心配（後書き）

誤字脱字・感想などありましたら気軽に伝えてください。

第10話 看病

「ほら、出来たぞ」

「ありがとうございます。……見た目は、普通ですね」

「おいおい。なんだかんだで最初から最後まで見てたじゃねえか」
「まあ、そうなんですけど」

結局作り始めから出来上がるまで、全行程を見せてもらった。

調理中のロンさんはキリツとして思いのほかかつこよかった。

なんだか納得いかないのは何故だろう。

手際の良さや迷いの無さなどのせいか、まるで魔法を見ているかのようだった。

その辺りは、スキルっていうのを使っているらしい。

面白くないからロンさんは普段ならあまり使わないって言うてたけど。

病人食である薄味のお粥をお盆に乗せ、リミエラの部屋へと向かう。

これは……困った。

両手が塞がって扉を叩けない。

入るだけならば肘を使えばなんとかなる。が、それはマナー違反だ。

兄とはいえ無断で妹の部屋に入るわけにはいかない。

ただそうするとリミエラが寝ていた場合、どうしたらいいかわからなくなる。

これはノックが出来る状態であっても同じことで、せつかく寝ている状態だったのに無理矢理起こしてしまうという状況は避けたいということをおもったところで、そういえば僕には便利な相棒がい

るのだと気付いた。

「というわけで、リミエラが起きてるかわかる？」

『私の扱いは改善されぬのかの……』

「いやだつてさ、僕が困ったときに助けてくれるのが相棒でしょ？
というか前も似たようなことしたよね」

『間違つては……いないのかもしれない。……リミエラ嬢はまだ寝
ておるようだが、もう少しすれば起きるであろう』

「そっか。じゃあここで少し待っていていようか。起きたら教えて」

『ああ』

と会話をしたのが大体30分ほど前。

まだかなー？ まだかなー？ と扉の前で待ち続け、何度かアイ
力さんが怪訝そうな顔をして通りすぎたり、母上が遠目から僕を見
て小さな笑みを浮かべたりするのを見て、これって見た目ただのス
トーカーじゃないかと気付いた頃、ようやくタマが口を開いた。

『リミエラ嬢が起きたようだな』

「お前……もう少しって言ってたじゃないか……」

『これを機に我を道具扱いせぬよう気を付けることだな』

「ちっ……!!」

この狐はなんでこう僕をいじめたがるんだ。

しかし僕の頭はすぐにリミエラのことを考え始めたので、正直ど
うでもよかった。

リミエラの前では些細なことなんてどうでもよくなるよね。世界
の真理だ。

「リミエラ、起きてる？ 入っても平気かな？」

「ん……にーさまですか？ だいじょうぶれす……」

寝起きのせいか少し口の回っていないリミエラ。すごくかわいい。肘を使ってどうにか扉をあける。

若干体のバランスが悪くなってしまうが、お盆のバランスは崩さないよう気を付ける。

そのせいで腕以外変な方向に傾いてしまい、なんとも間抜けな姿でリミエラの部屋へ入ることになってしまった。あ、タマ落ちた。

「ごめんね、寝てたかな？」

「いまおきたところなのでだいじょうぶです。どうかしましたか？」

「朝食べられなかったって聞いてさ。食べられる？」

「あんまりおなかすいてないです……」

「でも食べないと調子よくなるじゃないよ？　少しでいいから、頑張つて食べてくれないかな？」

「……たべたらりみえらといっしょにいてくれますか？」

「うん。リミエラが不安なら、手をずっと握っててあげるよ」

「……わかりました。がんばります」

少し気だるそうに、体を起こすリミエラ。

僕は未だにどこにも置いてなかったお盆をとりあえず机に乗せ、リミエラを背中から支える。

「ありがとうございます」

「辛いなら寝たままでもいいよ？　大丈夫？」

「はい」

意識が少しはつきりしてきたのか、はつきりと答えるリミエラ。小さめの鍋から小皿に少量のお粥を入れ、れんげと共にリミエラに渡す。

部屋に入るまで30分ほどの時間を要したせいかなり冷めてい

るが、冷めても全然美味しいはずだとロンさんは言っていたので、火傷の心配がない分いいだろう。

「ほら、リミエラ。少しでいいから食べてごらん」

「……………」

「どうしたの？」

「にーさま、たべさせてください」

「！！」

やばい！きゅんときた。

少し弱ったリミエラの上目遣いから繰り出されるお願いというスパーコンビネーションは、この世の誰もが頷かざるを得ないだろう。間違いない。

むしろこれで断る奴がいたら僕が殺す。さあかかってこい！

「にーさま………？」

「え？ ああ、ごめんね。わかった、食べさせてあげるから貸して

ごらん」

「はい」

リミエラの不安そうな声に現実へと引き戻される。

リミエラは僕が嫌がっているように見えてしまったのかもしれない。失敗した。

「ほら、あーん」

「あー……………」

れんげに少しだけお粥を乗せ、リミエラの口へと運ぶ。

このお粥は冷めているが、こんな形でリミエラの世話をしてあげられるなら、少し温かいくらいが丁度よかったかもしれない。ふっ

「！　ってやりたいよね。」

小さな口をあけて僕の差し出したそれを食べるリミエラの姿は、それはもうかわいいものだった。

なるほど、これが天使か！　よくわかるよ！

「ん……。にーさま、もうおなかいっぱいです」

「そう？　まあ仕方ないか。よく頑張ったね」

その愛らしい姿を微笑ましく眺めながら何度かお粥をあげていると、リミエラが食べられないと言って一息ついた。

小皿１杯分くらいしか食べられなかったけど、何も食べないよりは全然ましだろう。

「リミエラ、えらいですか？」

「えらいえらい」

「えへへ……」

再び上目遣いで見つめてくるリミエラの頭をなでる。

少しくすぐったそうに目を瞑るその姿は、脳内メモリに永久保存しておきたいと思う。

最初は薬も飲ませようかと思って用意しておいたんだけど、母上が熱が安定しているうちはやめておきなさいと言っていたのでそれは渡さずに水だけを渡す。

あまりにも苦しい様だったら飲ませるようには言われたけど、今のこの様子ならおそらく大丈夫だろう。

とりあえず、少し汗をかいているようだったので着替えさせることにした。

アイカさんと呼んで来よう。

「リミエラ、着替えだけしてもう１回寝ようか。アイカさんと呼ん

でくるから少し待っててね」

「にーさま……いっしょにいてくれるっていいました」

「うつ……いやとりあえず服を着替えたなら一緒にいてあげるからさ」

「ごはんたべたらいっしょにいてくれるっていいました……！」

「わ、わかったよ。でも服だけ、ね？」

「……にーさまがきがえさせてください」

「え？」

「にーさまがきがえさせてください！」

「……いや、それはちよつと……」

リミエラが涙目で僕に爆弾発言をしてくる。

いや勿論、ロリコンってわけじゃないし（シスコンだけど）、興奮するからまずいってことじゃないんだけど、でもやっぱり問題あると思うんだよね……。

「にーさまがきがえさせてくれないとねむりません」

「はあ……。わ、わかったから……。寝巻とか、どこにあるのかな

？」

「あつちです！」

僕がそう言うとりミエラは、ぱあと満面の笑みを浮かべる。

さすがにずっと眠らないということはないけど、ここで無理されるほうがやっぱり大変だ。ちよつと罪悪感的なのが拭えないけど……。

…。

「ほら、手をあげて」

「はい」

そつやって順番に服を着替えさせていく。

その間、リミエラはにこにこことご機嫌な様子だった。

まあリミエラが喜んでいるならいいか。

「それじゃあ、もう1回寝ようね。手、握っててあげるからさ」
「はい。にーさま、ありがとうございます」

そう言つと疲れたのか、すぐにすやすやと寝息をたてる。
ちよつと無理させちゃったかもしれないな、反省しないと。

『坊はリミエラ嬢には絶対に勝てぬな』

「勝てなくてもいいよ。リミエラさえ元気なら……って」

リミエラが眠ったことを確認したのかタマが話しかけてくる。
こいつにアイカさんと呼んでもらえばよかったんじゃないだろう
か……。

第10話 看病（後書き）

誤字脱字・感想などありましたら気軽に伝えてください。

第11話 不安（前書き）

別の原稿が全く進まないので息抜きに更新。
自由に動かせることがこんなに楽だとは……。

第11話 不安

リミエラが体調を崩した日から数日が経過し、既に夏の第2月へと入っていた。

「はあ……はあ……」

「リミエラつらい？ なにかしてほしいことはある？」

「おみず、のみたいです……」

「わかった。ちょっと待っててね」

リミエラの体調は、日により多少の前後はあるもののあまり良くなっていなかった。

母上に言われ、街の診断所へと馬車で街へと向かっているのだが、やはり負担がかかってしまうのか少し辛そうにしている。

本当なら呼んでしまえばいいのだが、通信技術の発達していないこの世界ではなかなか難しいようだった。

僕らの家は街から少し離れたところにあるため、診断医を呼びに行ってから戻ってくるとなると結構な時間がかかってしまう。

診断医もすぐに動けるとは限らないそうなので、負担がかかることを承知でこうして街へと向かっているのだ。

「ほらリミエラ、水だよ。飲める？」

「はい……」

一緒に来てくれているアイカさんから水を受け取り、座席で横になっっているリミエラの口へと運ぶ。

御者台には使用人の一人、主に馬の世話や庭造りなど主に外の仕事を担当してくれているロイドさんが乗っている。

雇っている使用人の数が少ないため、アイカさんやロイドさんな

ど、複数の役割を兼任している人が多い。

「リオン様、そろそろ街へと到着します。馬車は街の中で乗ることができませんので、降りる準備をしていただけますか？」

「わかりました。リミエラ、降りるから起きられる？」

「はい……」

ロイドさんに声をかけられ、リミエラの様子をうかがう。目を開けるが辛いのか、目を瞑ったまま手をふらふらと動かしている。

その手を軽く掴み、背にもう片方の手を添えリミエラの上体を起こす。

少ししたところでゆっくりと馬車が止まり、アイカさんと一緒に馬車を降りる。

「リミエラ、ごめんね。ここからは僕が背負っていくから、辛いかもしれないけどちょっとだけ力を入れられるかな？」

「はい……。にーさまといっしょ、うれしいです……」

そう強がって笑ってみせるリミエラはやはり辛そうだ。

前世を思い出してから初めて来るルベラードの街中を、見回す余裕など全くないまま診断所へと辿り着く。

「若様、私が手続きをしますなのでこの辺りでお嬢様と休んでいてください」

「わかりました。よろしくおねがいします」

そう言っアイカさんが受付へと歩いていく。メイド服で、今まで周りに知ってる人しかいなかったから気付かなかったけど、

めちやくちや視線を集めている。アイカさんは気にならないんだろ
うか。

周りの視線を集めたアイカさんが戻ってきて少しすると、看護師
さんが呼びに来る。

「といってもここは診断所なので、あくまでお手伝いさんみたいな
ものなのだそうだが。」

「診断医のマウノ＝ヴァオリです。今日はレドリック様のお嬢様が
体調不良ということで来られたそうです。」

「はい。数日前から微熱が続いています。」

「なるほど……。」

アイカさんと話をする診断医のヴァオリ先生が少し考えるように
腕を組む。

父上を様付けで呼んでいるのは、なんでも伯爵位を持っているら
しく、この街の領主も兼ねているからなんだとか。父上の名前も、
街の名前を入れレドリック＝ルベラード＝ケイリスとなるらしい。

元々は中央都市に住んでいたのだが、母上との婚姻の際に地方へ
と移ったのだとか。

あまりその辺りの話はしたがらないので、詳しいことはよくわか
らないのだが。

「お嬢様は確か、水の季節生まれでしたね？」

「はい。冬の第1月です。」

「もしかしたら魔力酔いかもしれません。」

「あの、魔力酔い……とは？」

ヴァオリ先生が僕に話を振ってくるが、よくわからない。おそら
くこちらの世界の専門用語だろう。

「今は火の季節なので、マナが火の属性寄りになっていることはお分かりですね？」

「はい」

「水の季節に生まれた子の場合、火の季節になると対属性の濃いマナの影響からか体調を崩してしまうことはよくあるのです。逆の場合などでも起こりえますが、元々水の季節というのはマナが薄いので水の季節生まれのお子様は火の季節に体調を崩されることが一番多いようです」

「なるほど……」

つまり相性の悪い属性持ちの人が陥りやすい状態だということなのだろう。

「特に魔力が増え始めたばかりのお子様にみられるケースとされているのですが……。お嬢様は確かまだ3歳でしたよね？」

「えーっと……はい、そうです。それがどうかしましたか？」

「いえ……魔力は普通、5歳の誕生月頃から増え始めるので、おそらく体に耐性が出来ていなかったのではないかと思われます」

「それなら……今年はこのまま我慢するしかない、とそういうことですか？」

「いえ、お嬢様の体の中に水の魔力をある程度流せば楽になると思います。今日はこの場に水の魔力を扱えるのが1人しかいないのですが……」

「何か問題があるんですか？」

「私の息子なので年齢が……。お坊ちやまと同じなのです」

「魔力を流すことに問題や危険といったものはないんですか？」

「それ自体は医療や診断といった技術的なものではないので」

「……それなら構いません」

「ありがとうございます。少々お待ちください」

そう言つとヴァオリ先生は席を立ち、一度診察室を出て行つた。
疲れているのか、眠っているリミエラを一度見てアイカさんに話しかける。

「……ヴァオリ先生はああ言つてたけど、本当に平気なの？」

「おそらくは……。私は魔力を扱うことができませんので絶対とは言いかねますが、今の状態よりも危険になるならばわざわざ提案されることもないかと。それに魔法を使うのならばともかく、ただ魔力を流すだけならば大きな危険はないはずです」

「なるほど。ところで、水の魔力を使える人が診断所にいないってのはどうして？」

「ここは診断所ですから。水の魔力や魔法を使える人というのはどうしても中央に近い医療院の方に取られてしまうそうです。勿論全員というわけではありませんが」

「つまり診断所っていうのは水の属性魔法が使えなくても平気なんだ」

「治療や治癒といったものは主に医療院がやっています。大きな怪我や重い病気を持った方が行かれることが多いので、軽症者は軽んじられる傾向にあります。」

「そっか……。大変なんだね……」

「ですから年齢が低いとはいえ水の魔力を扱える方がこの場にいるということは運がいいとも言えます」

やむを得ずヴァオリ先生には構わないと告げたけれど、やはり不安なものは不安だった。

これでリミエラを危険にさらすような可能性があるようなら、連れてきてもらつても悪いが断らせてもらつつもりだった。

今の状態より悪くなるということはなさそうだし、逆に言えば運がいいと言われてしまえばこのまま任せる方向でいった方がよさそ

うだ。

「なにすんだよ引つ張んな！」

「いいから来なさい。お前しか出来ないことなんだ」

「知るかよそんなこと！ だから引つ張んなって！！」

ちよつとちよつと……めちゃめちゃ不安になる声が聞こえてくるんですけど……。

アイカさんと軽く目を合わせ、お互いどうしようかと目線だけで会話をする。

「すみませんお待たせしました、息子のミカエラです。ほら、挨拶しないか」

「なんで俺がこんな奴らに……」

「ミカエラ！」

「うつさいな！ いい加減にしろよ！！」

「あまり騒がないで貰えませんか？ 妹が起きてしまっんですけど」

内心、うつさいんだよクソガキとか思いつつなんとかこらえて丁寧に対応するよう心がける。先生、年齢どうこうより性格に難ありだと思います。

「こつちだつて勝手に連れてこられただけなんだ。お前の妹なんてどうでもいいよ」

「は？ お前今なんて言った？」

「ミカ！」

「わ、若様！ 抑えて！ 抑えてください！！」

訂正。難ありどころじゃない。こいつは頭がかなりおかしい。リミエラをどうでもいいとか……。思わず素が出てしまった。

先生が息子の方を、アイカさんが僕を必死に止めてくるがもう遅い。

どうしてくれようか。

第11話 不安（後書き）

誤字脱字・感想などありましたら気軽に伝えてください。

11 / 3 誤字がありましたので修正しました。

第12話 喧嘩（前書き）

さ迷いにさ迷ったあげくわけのわからない方向へ行ってしまった気が……。あれ……？

第12話 喧嘩

「んっ……」

「……ほら、リミエラが起きちゃったじゃないか。どうしてくれるんだ」

「知らねえよ」

相変わらず気だるそうにその身を起こすリミエラ。

こっちの気もしらずに頭のおかしい奴が騒いでいる。

「……にーさま？」

「ごめんね、リミエラ。ちょっとクソガキがうるさかったね。気にしないで寝てていいよ」

「クソガキって俺のことか？ なあお前喧嘩売ってんの？」

一言リミエラに言い聞かせ、アイカさんへと預ける。こんな状況でも寝れるリミエラは間違いなく大物だな。さすが僕の妹。

……こんな奴は正直どうでもいいんだけど、さっき言ったことを心の底から後悔させてやらないといけないし、リミエラの体調回復にこれが必要なら仕方ない。

「おいお前、とりあえず土下座しろ」

「……喧嘩売ってるんだよな？」

「いや悪いな、間違えた。この惨めな豚にリミエラ様の体調を良くする手助けをさせていただきませんかと言いなから土下座しろ」

「むしろその言い方ではいとか言う奴がいたら見てみたいわ……」

「人がこれだけ下手に出てやってるのに……全く」

「どこが!？」

「喧嘩ならいくらでも買ってやるから、今はとりあえずリミエラを

助けなよ。さあ」

「売ってきたのお前だよな？どう考えても喧嘩売ってきてるのお前だよなあ！？」

彼は本気で分かってないんだろうか。なんて愚かな奴だ。

どう考えたってリミエラを蔑ろにした彼にこそ非がある。ないがし

土下座が伝わったことに若干の感動を覚えつつ、定番の路線へ変更する。

「こんなにかわいい子が目の前にいるのに助けないのか？ お前最低だな。……ああ、出来ないだけか」

「はあ！？ 魔力流すだけだろ？ そんな簡単なこと出来ないわけないだろ！」

「じゃあやってくれよ」

「嫌だね。なんで俺が」

「出来ない奴つてのはそうやって逃げるんだよな。結局口だけ。出来ないなら出来ないって言えばいいのに」

「……お前、あとで俺に土下座しろよ……？」

ふつ……所詮は子どもだな。こうやってプライドを刺激してやれば簡単に動く。

こんなのにリミエラを預けるとか不安で仕方がないし、正直嫌なんだけど、僕が魔力を扱えない以上仕方がない。

僕はリミエラを守るために力をつけようとしたんじゃないんだろつか。無力な自分に嫌気がさす。

「な、なあ……？ 彼は本当に5歳なのかい？ とてもそうは見えないんだが……」

「え？はい……そうですけど。え？ ……………あれ？」

ヴァオリ先生とアイカさんが喋っているようだが、リミエラに近づく害虫を睨みつけるのに必死で内容までは聞こえなかった。

「はぁ……はぁ……」

「……………」

あいつっ！リミエラに触りやがった！！今すぐにも引きはがしたい！！！！

「わ、若様……！ 落ち着いてくださいっ…………！」

「がるるるる！」

アイカさんに押さえ付けられているため、僕はその場から動くことが出来ない。

いや理性ではわかってるけど、心情的に譲れないものって……あるよね？

「……終わったぞ」

「リミエラっ！」

「っ！ 何すんだ！」

その言葉を聞いた瞬間、アイカさんの腕を丁寧にかつスピーディに外し、すぐさま駆け寄る。何かがぶつかった感じがしたが、きつと気のせいだろう。

「あれ……？ え？ ……若様？」

アイカさんは、こんらんしている！

「すう……すう……」

「……よかった」

少なくとも悪化しているということはないようだ。
すぐに結果が出るようなものでもないが、熱もなんとなく下がっているように感じるし、呼吸も随分安定した。

「おい」

「先生、ありがとうございました」

「え？ ああ……よかったね」

「はい」

「……おい」

「それじゃあアイカさん、戻ろうか」

「は、はい。若様……いいのですか？」

「え？ 何が？」

「お前！ 無視すんなよ！」

「………うるさいな」

まあこうしていれば絡んでくるのはわかってたことなんだけど。
最大の懸念事項がなくなった今、僕はこいつに何をしても良いわけだ。素晴らしいね。

「お前、俺に土下座しろよ」

「は？ なんで？」

「さっきそう言っただろ！」

「それは君が言ったことだろ？ 僕は承諾した覚えはないね」

「……上等だ。その喧嘩買ったぜ」

「外、出ようか。ここじゃ迷惑だ」

さて、とりあえずリミエラから離すことには成功したわけだけど、
ここからどうしよう。

こういうときに便利そうなタマは、今日は連れてきていない。妖狐だつてばれても問題だし、大人しく待っていてもらうことにしたんだ。

まあでも実年齢（？）20歳過ぎの僕が、たかだから歳児に負けてはいられない。

およそ10メートルほどの距離を開け、向かい合わせに立つ。

「覚悟はいいな？」

「どこからでもどうぞ」

僕がそう言つと、彼は一瞬目を閉じ力を抜いたかと思うと一気に駆け出して来た。

その瞬間、彼の魔力が動いたのを理解する。

魔法か！

「> 水の弾く！！」
アクアショット

彼は駆けながら発動鍵を発する。
コマントキー

その右腕から水の塊が生まれ、凄まじい勢いで僕へと向かってくる。

しかしこれは……。

「ふっ！！」

「は？」

僕は右腕を振るい、その魔法を横へ弾き飛ばす。

タマの魔力より遥かに小さい力だったからいけるとは思ったんだけど、実際うまくいってちょっと安心した。

「え？ いや……何だよそれ……？」

「はあ！」

「ぐっ……！」

そのことに驚いたのか、彼が動きを止めた。

その隙を僕が見逃す筈がなく、腹の真ん中に思い切り蹴りを入れてやった。

……やばい。簡単だな。

「ど………どういうことだよ……！」

「君が僕に勝とうだなんて、100年早いな」

腹を押さえ蹲る彼に向って、とりあえず悪役っぽいセリフを言うてみる。

心を押し折った感じがするしなんだかちょっと楽しい。

「わ、若様！ お怪我はありませんか！？」

「全然平気だよ。余裕だったね」

「いや………確かに余裕そうでしたけど………魔法攻撃を受けたんですよ？」

「あのおもちやみたいな攻撃のこと？ あんなの大したことないよ」

「大したことないって………」

アイカさんが驚愕している。何故だ。

あんな水鉄砲を少し強くしたみたいな攻撃にやられるはずなんじゃないのに。

まあ確かに速度だけはあったから外から見ると危なそうに見えるのかもしれない。魔力の動きでタイミングを計ったからあんまり気にしなかったけど。

「これは………凄いな………」

傍で見ていたヴァオリ先生が呆然した様子で呟く。
僕の知らない間に凄いことがあったらしい。何が起きたんだ……。まあその辺のことはどうでもいいか。とりあえず……。

「無様に這いつくばる気持ちはどう？」

「くそっ……！」

「これに懲りたらリミエラのこと、どうでもいいとか言わないことだね。次言ったらこれくらいじゃ済まさないから」

「お前…… たったそれだけのことで……？」

「…… よし、殺そう」

「わ、若様！ 帰りますよー!!」

そう決意した瞬間、アイカさんに思いつきり引つ張られる。

いつの間にか眠っているリミエラを器用に片腕で抱えているアイカさんは、僕を凄いい勢いで引きずり街の外へと駆けていく。

「…… アイカさん、自分で歩くよ」

「そ、そうですか……？ 突然戻ってあの子を踏みつけに行ったりとかしませんか？」

「しないよ。大丈夫」

「わ、わかりました……。正直かなり不安ですが……」

「リミエラを背負ってれば信用してくれるよね」

「まあ…… お嬢様に害のあることはしないですよ。わかりました」

用心深く確認を取ってくるアイカさんに解放してもらい、リミエラを受け取ろうとする。

しかしアイカさんはリミエラを下ろさずそのまま背負ってしまった。あれ？

「……？」

「若様、あのように街の子に喧嘩を売るのはよくありませんよ」

「いや売ってきたのは彼が先で」

「言い訳しないでください」

「……はい」

「でも……少し安心しました」

「なにが？」

「若様はお嬢様のために行動なさったのですよね？」

「うん」

「その気持ち、いつまでも忘れないであげてくださいね」

「ん……？ 正直よくわからないけど、わかったよ」

「お嬢様を守ってあげられるのは、若様だけってことですよ」

ふふっ、と楽しそうに笑みを浮かべるアイカさん。

言っていること自体はよくわからないけど、なんだか大切なことを言われているような気がする。

もちろん、リミエラを守ることは僕の最優先事項だ。

僕の天使は誰にも傷つけさせない。

「ですが、言葉遣いが汚いのは関心出来ません。気を付けてくださいね」

「すみませんでした……」

アイカさん怖いです。マジで。

第12話 喧嘩（後書き）

誤字脱字・感想などありましたら気軽に伝えてください。

第13話 力技

『ふむ……中々面白いことをしてきたようだの。付いていけばよかっただろうか』

「やめてよ……。そんな面白半分で騒ぎとか起こされたらたまらない」

あれから数日が経ち、アイカさんの教育を受けた僕は外でタマに捕まっていた。

そして街での話をさせられ、最初の感想がこれだ。

まあ街での話とはいえ結局観光とかではなかったから変な感じなんだけど。

「まあそれでも、リミエラの体調が良くなったみたいで本当によかったよ」

『そうさの。お陰で坊の鈍った体を叩きなす時間が取れるというものよ』

「げっ……またやるの……？」

『当然。それに今回の件で我の訓練が有意義なものとなったであろっ』

「確かに……そうかもしれないけど」

例の喧嘩の際、魔力による攻撃を受けてもなんともなかったのは特訓の成果が大きいのだろうとは思っていた。

簡単に言えば、タマの力が強いから5歳児程度の力なんて大したことないって話。

『坊の場合は少し特殊みたいだがの』

「……どういうこと？」

『そもそも魔力やマナを媒体にする攻撃というものを素手で受けよう、というその姿勢が意味不明だな。普通は魔法で攻撃されたら避けるか魔力をあてるかしなければ相殺など出来ぬ』

「でも振り払えたよ？」

『そこが要するに他の人間と違うところなのだろう。以前我と出会ったときもそうであったが、坊は魔力に対する感受性が桁違いなのだ』

「力技で叩き潰したってわけじゃないの？」

『おそらくだが、魔法による現象を引き起こしている魔力とマナの結合を引き千切ったのだろう。ある意味では、それこそ力技とも言える』

「魔力って……なんとなくわかるものじゃないの？」

『非凡な才能というのは、持っている側からしたらなんてことないものなのかもしれぬな』

要するに、異世界から来たせいかわるか何故か人より魔力を感じる事が出来るというパラメータのお陰で、僕は魔法の分解が出来るという事なのだろうか。

実際にやってみたのはこの前の1度きりでしかないし、あんまり実感が湧かない。

『しかしそれは、坊の魔力がその子どもに対し圧倒的だったという前提がある』

「……つまり？」

『力関係を見誤っていれば倒れているのは坊だったということだな』
「なんて博打」

『我との契約やその後の成長によりたかだか5歳児程度に負けるはずもないが、魔力というのは難しいものだ。あまり過信することのないようにな』

「偉そうに言われるとなんかイラっとくるよね」

結局あの時に僕が魔法を破ることが出来たのは、魔力自体の認識力が強い、そして単純に魔力が大きかった、という2つの優位性があつたからこそなのだという。

本当にただの力技だな……。

水の属性魔法は攻撃に特化したものが少ない上に、今は火の季節というマイナス要素もあつたために弱い攻撃でしかなかったということも勿論あるのだろう。

まあ……速度自体はかなりのものだったしまともに受けたとしたらただでは済まなかったのかもしれない。少なくとも あんなものを前世で受けていたら吹っ飛ぶくらいはしていただろう。

『坊が我との出会いで成長してくれていたのだとすると、少し嬉しく思うな』

「タマがいなかったら僕は何も出来てないよ」

『やることは変わらないように思うがな』

「そうかな。案外怖くなって逃げ出しそうだけど。今回も結局自信があつたからこそだし」

考えるという点においての年齢的なアドバンテージ。

今回においてそれは魔力うんぬんよりも何よりも、僕の最大の優位性だった。

もし争う相手が例えば大人だったら、剣を持った悪人だったら、そう考えると本当にどうなるかわからない。

同年代相手には発揮出来ているこの要素ですら、年を重ねるにつれてその優位性を保てなくなるものでしかない。そこから先はここから積む自分の実力で戦っていくしかないのだ。

『心配するな。坊が戦略級兵器並みの力を手にするよう我が手助けしてくれよう』

「そうやってさ……僕の記憶から変な言葉覚えるのやめてよね」

『今では心底、坊と出会えてよかったと思っておる』

「やめてよね……そこでそういうこと言うの。なんか悲しくなるよ」

タマからすれば僕が元いた世界というのが異世界だ。

それこそ異世界ファンタジーの領域だからこそ、物語的に楽しんでいるのだろうけど。

『戦略級兵器……とは言わぬが、坊はおそらくそこらの魔法師よりも大きな魔力を既に得ているはずだ』

「何それ。自覚とか全然ないんだけど」

『ここでは比べる相手がおらぬからの。坊の両親はかなり大きな魔力を持っているし、我は比べることがまず間違っておる』

「タマには敵わないって言われたみたいで凄く悔しい」

『敵うとも思っておるのか？そもそも我は未だ成長中の身だ。坊に伸び代があるように、我にもまだまだ伸び代がある』

にやりと笑って言い捨てるタマは、完全に僕を見下している。

確かに敵わないけど、そんなのわかってるって話だ。

おそらくけど、タマはこう言いたいのだろう。

僕より強い奴なんていくらでもいる。努力することを怠るな。と僕にとつて、この世界でのことはまだまだわからないことばかり

だ。備えすぎて困ることはないし、その言葉は素直に受け入れることにした。

『危ないこともあるかもしれぬが、坊が魔法を正面から打倒出来るというのならそれを伸ばすのもありかもしれぬな』

「でも力の差がないと難しいんでしょ？」

『力なんてものはこれからつけていけばいいものだ。いざという時の防御策があるにこしたことはない』

「……確かに」

『勿論、無理にやろうとすればそれはただ怪我を負うだけだ。これから少しずつ訓練していくから見極めることを覚えるのだな』

『防御策で怪我とか……間抜けでしかないもんね』

『今回は腕で振るい落としたようだが、きちんと物にすれば動作無しでもいけるであろう。相手がマナの確保をしたところで魔力との合成をかき乱す、とかな』

『その方が危険なさそうだね。楽そうだし』

『楽ではないぞ。自分の身から魔力を放出するわけだから当然消耗もする。身から離さず断ち切れば力自体は消耗することはない』

『身の危険か、身の消耗かの2択って……結構使い勝手悪いね』

『仕方なかるう。まああくまで推測でしかない故、最終的にどうなるかは知らぬがな』

『無責任だな』

『おそらく坊しか使えぬというものに責任を持てというのがまず無理な話だ』

『つまりこれって特殊スキルになるんだ』

『魔力使用を条件においた特殊スキル、ということになるだろう。』

他とは少し違うかもしれぬが、大勢の認識では間違いなく特殊スキルだ』

『まあ……使えればそれでいいや』

『使えるかどうかは坊次第だがな』

そんなことをタマと話し、大まかな現状を認識した。

とにかく僕には力が足りない。

今年は間に合わないとは言われたけど、身を守るだけならばもしかしたらなんとかなるかもしれないと言われるとやる気が出てくる。

魔力の放出とか、使用法とかはまだ全然わからないけど、力一杯殴るだけでいいのなら簡単だよな。

「にーさまっ！」

そうやって考えているとリミエラが走って家から出てきた。
体調もかなり良くなったみたいだ。

「リミエラ、危ないからあんまり慌てちゃダメだよ。それにまだ完全になくなったわけじゃないんだから」

「だいじょうぶです！ たまとはっぴりあそんでないでりみえらともあそんでください！」

「わかった。わかったからとりあえず、家に入ろうね」
「むっー！」

少しむくれて見せるリミエラはなんともかわいい。

森はマナが濃いからあまり近づけるなど両親にもタマにも言われたから戻るよう促す。

夏場は少し窮屈になってしまいかもしれないが、その分ちゃんと構ってあげるようにすればきっと大丈夫だろう。

「にーさまっ！ おはなししてください！」

「そうだね。じゃあ今日はお姫様の出てくる話をしようか」

「はい！」

「昔々あるところに、リミエラというそれはかわいいお姫様がいました」

「わたしがおひめさまですか？」

「そうだよ。リミエラがお姫様だ」

「すごいです！」

そうやって定番の話を少し変えながら語っていく。

僕のただ1人のお姫様。いつまでも元気でありますように。

第13話 力技（後書き）

誤字脱字・感想などありましたら気軽に伝えてください。

11/3 指摘に伴い一部修正しました。

第14話 不穏な空気

夏の季節が終わろうとしていたある日のこと。
再びリミエラが体調を崩し始めた。

「ふう……」

「母上……！ リミエラの様子は！？」

「大分苦しいようね。熱もかなり上がってきているわ」

「朝方、鳩を送った。もうしばらくすれば先生が来てくれるだろう」

慌てる僕に対し、比較的落ち着いている父上と母上。

勿論、表に出ていないだけなのだろうけど、その冷静な様子は逆に僕を慌てさせる結果となる。

鳩というのは先日診断所を訪ねた際にアイカさんが受け取っていた伝書鳩だ。

また様子が変わるようなら送ってくださいと渡されたそうなんだけど、実際に使うことになるとは思っていなかった。

あれからすぐというならまだしも、少し期間が空いたことに逆に不安な気持ちになる。

「あまり慌てるとリミエラが不安になるわ。兄としてしっかりしなさい」

「……はい。わかっています」

「わかってないわ。リミエラはリオンに懐いているから、あなたの様子があの子に与える影響というのはとても大きいのよ。自覚しなさい」

「………はい」

「落ち着くまで、リミエラの部屋に入ってはダメよ」

母上は僕にそう言うとその場を離れた。

不安に思っ て心配すればするほど、僕はリミエラに会えないということになる。

心配のしすぎは良くないと言われたものの、やはり病気というのは心配の種でしかないのだ。

「リオン、安心するんだ。もうすぐ先生が来るから」

「そうですね……」

父上が僕を安心させようと一言声をかけてくれる。

ただ元々現代日本に住んでいた身からすれば、この世界における医療技術が発展していないのはよくわかるし、それは魔法という反則技があるからこそなのだろうと思う。

だから、ヴァオリ先生が来たとしても、そして仮に魔法医の先生が来たとしても、僕には不安でしかない。

大きく発展することを止められることになった“現代医療”。

原理のわからない“魔法医療”。

僕にとってその2つには全く差が無く、結果を出して尚不安が付きまとう。

はたしてそれは本当に治っているのだろうか、と。

『心配するのは確かにわかるが、坊はあまりにも慌てすぎだ』

「タマまでそういうこと言うのか……」

『考えていることも勿論わかるが、坊がどうにか出来る話ではない』

「……そうなんだけど」

どれだけ冷静になろうとも、不安だけは拭えるものではなかった。

そしてかなり時間が過ぎ、ようやく1人の男性が到着した。

「どうも、クリストフです」

「娘のためにご足労くださいましてありがとうございます」

「それで、娘さんはどちらに？」

「部屋で寝ています。こちらへ」

母上が応対し、リミエラの部屋へと向かう。

前回の症状は魔力酔いだった。だからおそらく、水の魔力を扱えないヴァオリ先生は魔法の使える人と呼んでくれたのだろう。

不安は変わるものではないから、それで治ってくれるならばなんでもいい。

『坊、我らも行くぞ』

「ああ……わかってるよ」

タマに促され、リミエラの部屋の前まで付いていく。

母上と先生はそのまま部屋へと入り、少し話をしている。

前日までの様子や朝からの変化などを話した後に診察を始めるのだろう。

『坊……なんだか不穏な気配を感じる』

「……不穏？」

『ああ。注意しておくようにな』

「よくわからないけど……わかった」

タマが珍しく真剣な物言いをしてくる。

何をどう注意したらいいのかわからないけど、とにかく頭に入れておこう。

「そんな！ 高すぎます！！」

「アイカ、抑えなさい」

「で……ですがっ……！！」

「こちらはわざわざ離れた場所まで来ているのです。払っていただけますよね？」

「……いいでしょう。ただしそれだけの仕事はしてください」
「わかっていますよ」

突然大きな声がして、その後の会話に注意を向けるとそんな話をしているのがわかった。

要するに先ほどいた医師が、こちらの足元を見ているということなのだろう。

ただ、医師の言い分も最もといえば最もなのだ。母上はその辺りを考え折れることにしたのだろう。

「わかりやすいといえばわかりやすいけど……迷惑な話だよ」

『そうだな。坊、すぐにでも飛びこめる準備をしておけ』

「なんで……？」

『これこそ杞憂であれば良いのだが……』

「……はあ、わかったよ」

さつきからタマの様子は本当におかしいと思う。

自分で僕に不安に思うなど言っておいてそれはない。ただ、その様子からは並々ならぬ物を感じるし、僕もなんとなく嫌な感じがする。

本当ならばすぐにでも踏み込みたいが、その衝動を抑え気を入れなおす。

「それでは治癒を始めます」

「……お願いします」

その声が聞こえた途端、大きく魔力が動いたのを感じる。
これが――魔法か。

僕ではまだこの様に魔法を使うことは出来ないだろうと、そう感じた。

その瞬間――

「うつ……！？」

『坊、入れ！！！！』

「え？……わかった！」

ドン！と、大きな音が聞こえた。

タマに促されすぐに部屋へと踏み込む。

タマは部屋に入ると同時、元の姿へと戻り壁に倒れている医師に向かい立つ。

『坊は嬢の傍にいてやれ』

「ああ……」

そう一言僕に言つとタマは医師を咥え、窓を開け外へと出ていく。何が起きているのかさっぱりわからない母上とアイカさん、そして僕は呆然とする。

「はあ……はあ……」

苦しそうなりミエラの声だけが、その場を支配していたのだった。

その後、戻ってきたタマにどういふことなのかを聞いた。

医師は少し離れた森の中に捨てておいてきたらしい。

『坊がりミエラ嬢に腕輪として与えた物があつただろう』

「護身具みたいになるって言ってたね」

『あれは悪意や害意というものに反応する。今回はそれが働いたということだ』

「あいつはリミエラを傷つけようとしてたってこと……？」

『詳しいことまではわからぬ。害意だけで動くのではないからな。もしかすると単純に“美味い仕事だ”と考えただけかもしれない』

「リミエラに魔法向けるときに邪な気持ちが入ってたってことか……！」

『そういうことだ。……そんな輩にリミエラ嬢を任せたくはないだろう？』

「ああ……。タマは今日、これが不安だったんだね」

『我は強く思ったことが多少わかると言っただろう。最初から感じてはいたが、治療とそれは別物だと思ひ言わなかったのだ。すまなかった』

「いや……注意はしてくれたいだし、いいよ。本当はそれで何も起こらないことが一番よかったけど」

勿論、あの医師が考えたことがタマの言うように単純なことであつたのならまだ構わない。それは治療の中身に関係することではないから。

でも、それがリミエラに害を与える可能性がある以上あんな奴には診てもらいたくない。

『そういう意味では、ミカエラ少年は間違いなく優秀だと言える』

「また……街に行かないといけないみたいだね……」

鳩はもう出してしまったし、再び街へ行つてヴァオリ先生の……

もつと言えは彼の元を訪ねなければならないだろう。

あまり気は進まないが、実績がある以上彼に任せるのが一番いいはずだ。

「……ということなので、明日の朝に再び街へ行きます」

「そう……。わかったわ、先生にきちんと説明してお願いしなさい。謝罪も忘れずにね」

「わかっています。アイカさん、一緒に来てもらえますか？」

「はい。若様とお嬢様のためならば、お供させていただきます」

こうして、2度目の街行きが決まった。

そして翌日、季節は魔の季節へと移ったとの知らせが届いた。不穏な気配は、もうすぐそこまで迫っていた。

第14話 不穏な空気（後書き）

誤字脱字・感想などありましたら気軽に伝えてください。

ミカエラは、本当はいい子なのです。

第15話 再び

「若様、そろそろです」

「わかった、ありがとう。……リミエラ、起きられる？」

「……はい」

そうして再びやってきた街。

本当は連絡が取れるといいんだろうけど、夜に僕らの家から街まで行くには少し危ないらしい。僕の場合は最悪タマがいるからなるとかなるんだけど……。

『ほう、ここが街か。人がたくさんおるな』

「……当たり前だよ。街なんだからさ」

今回はタマも連れてきた。というか勝手に付いてきた。

昨日みたくもしものがあつたらいけないから、とか言ってたけど……好奇心を満たすためだけに来たような気がしてならない。

元々大きな狐として森で暮らしていたタマは、街へ出たことがないのだそうだ。

観光気分でいられても困るんだけどね……。

「若様……傍目から見ると独り言を喋っているあやしい人ですよ？」

「……………最悪だよ」

『まあそう言っな。我の言葉に全部反応せずともよい』

タマは実際に声を出して喋っているわけではないので、周りの人間には聞こえていない。

複数人に喋りかけられないとかそういうことじゃないからアイカさんにはわかるんだけど、アイカさんは客観的に見てあやしいと言

っているのだ。

無視してもいいとは言っているけど、それは要するに好き勝手されても止めようがないということじゃないんだろうか。
ペットに喋りかける感じならなんとかなる……か？

『我もリミエラ嬢には早く良くなつてほしいのだ』

「そうだね。ありがとう」

『ようやく魔断が身に付き始めた頃だというのに、この様なことばかりに気を取られていてはいつまでも成長せぬ』

「おいお前な……」

「若様、お言葉遣いにお気を付けくださいね」

「はい……」

思わず素が出てしまった。アイカさん怖いよ。

魔断というのはこの前街に来たときに僕がやった、魔法を力技で断つという技のことだ。

これは魔法だけでなく魔力を使ったものに対して効果を発揮すると知ったのが少し前のこと。タマとの鍛錬の際に試しにやってみたら出来たのだ。

おそらく魔力その物をマナへと分解しているのだろう、とのこと。ちなみに、命名者はタマ。本当は名前なんてわざわざ付けるつもりはなかったんだけど、イメージのしやすい名前を付けた方が楽になるらしい。勝手に付けられた。

というか……全然ペットとの会話じゃないじゃないか。

「少々お待ちください。受付を済ませてきます」

息苦しそうなリミエラを抱え、診断所に辿り着く。

アイカさんは受付手続きをしに行った。

『む……少々苦しいな』

「我慢してよ……ここ診断所なんだし、あんまり動物がいるのはよくないでしょ」

『そうなのだが……これは予想していなかったな』

「あんまり動かないでね」

タマは荷物の中に詰め込んでいて、少し苦しそうだ。

リミエラをゆっくりと横に寝かせ、軽く辺りを見回す。

どうやら診断所は街の人が集まる場所にもなっているらしく、具合の悪くなさそうな人たちもちらほらと見える。勿論、僕らと同様に診察目的で来ている人の方が多いのだが。

ふと、情報誌が置いてあることに気付いたので手に取ってみる。

「……タマって文字わかる？」

『必要がないからな。読めはせん。それに今は見えぬ』

「そうだった……」

そりゃあ荷物の中に入ってたなら読めるわけがないな。色々出来るから、当然透視的なものも出来るのかと思ってた。

元々ちゃんと教育は受けていたようだし、独学で多少勉強したから全く読めないってことじゃないんだけど、専門用語みたいなのはまだ読めない。

とりあえず読めないものは飛ばそうと思い、情報誌に目を通す。情報誌というのは数日おきに発行される新聞みたいなものだ。

市場が独占状態なのにも関わらず、その値段の安さから街に住む人は殆ど購読しているらしい。独占状態だからこそ値段が高くなくてもいいのかもしれないが。

内容は雑多で、今回書いてある中で大きな話題は3つ。

季節が夏から魔の季節へと移ったということ。情報鮮度を考えると、数日前から移っていたのだろう。

中央都市の王族関係のいざこざがあったようだということ。詳しいことはいまいちよくわからなかったけど、お姫様がトラブルに巻き込まれたみたいない感じがする。

そして中央都市にある魔法学園の学園祭の告知。これは魔の季節における名物的なものらしく、この季節は毎年多くの人が中央都市へと行くらしい。それだけ関心も集めているのか、特集記事が一番多く載っていた。所々に絵や図なども載っていて、それほど読むのに困らなかつたし面白そうだった。

「若様、手続きが終わりました。もう少し時間がかかるようです」「ありがとうございます。出来るだけ早く診てもらいたいんですけど、そうもいかないよね……」

アイカさんが戻ってきたため、情報誌を置きたため息をつく。

アイカさんはリミエラの頭を腿の上に乗せ、汗を拭き始める。

リミエラを辛い状態でおいておくのは心苦しいし、本当は今すぐにでも駆け込みたいんだけど、他にも患者さんはいるしその辺りはどうしようもないだろう。

「情報誌を読まれていたのですか？ わかりますか？」

「うーん……学園祭の記事は結構わかるけど、他はそこまで。何か気に留めておくようなことってある？」

「そうですね……今年は魔の季節への移行が少し早いそうです。マナの上昇と魔物の活性化が例年より早いと書いてありますね」

「近くの森にも魔物が出るかもしれないね。なんとかしないといけないかな……」

そうやってアイカさんと何度か言葉を交わしているうちに、ようやく順番がきた。

辛そうに目を瞑るリミエラを抱き上げ、診察室へと向かう。軽くノックをして部屋に入り、すぐにリミエラをベッドへと運んだ。

「お久しぶりです。すみませんお待たせしてしまつて」

「いえ……。前よりも苦しそうなんですが……前と同じなんでしょうか」

「……………おそらくそうではないかと思います。先日魔法医の方をお呼びしたのですが、治りませんでしたか？」

「それが……」

ヴァオリ先生に昨日起きたことを話す。先日、と言っていたけど、もしかすると腰を動かすまで数日あったのかもしれない。あのクソ医者が。

「そうだったんですか……。本当にすみませんでした」

「いえ、それは先生のせいではないので。とりあえずミカエラくんを呼んでいただきたいんですが」

「そういうことでしたら。少しお待ちください」

そう言つてヴァオリ先生は席を立つ。

後は彼が素直に協力してくれるかどうかんだけど……この前痛めつけたのがこうやって仇になるとは思わなかった。

『坊、苦しいのだから出て来良いか？』

「ああ……ごめん。すっかり忘れてた」

『……ふう、全く……物扱いとはな』

「いやタマよりリミエラの方がどう考えたって重要だし」

『まあいいが』

案外しれつとしているタマは、僕の頭の上に乗るゆつくりと部屋を見回す。

元々人の生活区には入っていなかっただろうし、初見の物珍しさがあるのだろう。

『なかなか良い場所だな』

「何が？」

『いい気が満ちている。先ほどの男は非常に優秀なのだろう』

「そういうのってわかるの？」

『彼が悪意を多く向けられていたのなら、もっと澱んだ空気になっているはずだ。このような場所では難しいことだが、それだけ腕が いいのだろう』

「よくわかんないけど、いい先生ってことなんだよね。なら運がいいんだろうな」

すると、扉の向こうから前と同じように声が聞こえてきた。

「い……嫌だ！ 俺はあいつに関わりたくない！」

「そんなことを言うな！ お前の力を待っている人がいるんだ。光栄に思いなさい」

「親父は他人のためばかりに働いてるけど、俺はそんなのしたくない！」

「いいから来なさい」

この前と同じように無理矢理引っ張ってこられたらうミカエラ少年は、部屋に入るとこちらを睨みつけてきた。

僕はそれを見つめ返し、真剣な表情で語りかける。

「……この前は色々あったけど、君の力を貸してほしい。僕には出来ないんだ」

「ふんっ……！ 誰がお前の言うことなんか聞くかよ」

「お願いだ。僕が気に食わないならそれでも構わないけど、リミエラだけはなんとかしてほしい。これ以上苦しませたくないんだ……！」

「お、おい……」

僕に頭を下げられると、落ち着かないのか彼は少し慌てた様子になる。

昨日タマから話を聞いて、僕は彼の評価をかなり改めていた。この前は彼にやれることを全力でやってくれたのだ。それに対する感謝と、僕の本心からの願いを形にして頼み込む。

「わ、わかった。わかったから……みつともない真似してんじゃねえよ」

「良かった！ ありがとう！」

「こっち来るな！ うざったい！！」

やれやれ。一度染みついた苦手意識つてのは中々振り払えるものではないから仕方ないかもしれないけど、こつちも邪険にされるとちよつと傷つく。

それと頭を下げることをみつともないと思われるのは悲しいことだ。人に対して礼儀を持つこと、態度を疎かにしないことはとても大事なことなんだ（と、アイカさんに教え込まれた）。

何はともあれ、これでリミエラが調子を戻してくれることだろう。一安心だ。

第15話 再び（後書き）

誤字脱字・感想などありましたら気軽に伝えてください。

第16話 大きな変化

「前と同じでいいんだよな？」

「ああ、魔力を分けてほしい。よろしく頼む」

「ふん……」

そう一言言葉を交わし、未だ苦しそうに眠っているリミエラの元へと近づいていく。

息を乱す美少女に近づく男……傍目から見ると危ない現場だな。憎たらしい。

少し見直したからといっても、リミエラに近づく男とかもうそれだけで排除の対象だよな。今はまだ幼いからそこまででもないが、成長した後のことを考えると嫌な気持ちになる。超絶天使の妹に近づく男ども……ああ憂鬱だ。

前回はあまり感じ取る余裕がなかったのだが、僅かに魔力が動くのが見える。

彼の体を光るように巡った後、リミエラに触れた部分から少しずつ流れ出す。実際に光っているわけではないのだろうが、なんとなくその様にした。

どこぞのクソ医者のように護身具に弾かれることもなく、無事にその作業を終える。

これで安心だなと思ったのだが、彼はそこで驚いたように呟く。

「どうということだよ……！」

どういうこと？むしろこっちが聞きたい。

そしてリミエラの様子は相変わらず辛そうに見える。

「おい、お前の妹はどうなってやがるんだ」

「意味のわからないことを言った拳句にリミエラを貶すなんていい度胸してるね……」

「い、いや……そういうことじゃなくてだな……」

「若様、ちゃんと話を聞いてください」

「……わかつてますよ」

「ミカ、説明しなさい」

「ああ……」

もう何度目になるかわからないアイカさんの静止を受けなんとか踏みとどまる。

ヴァオリ先生に促された彼は、一度呼吸をして話始める。

「こいつに俺の魔力を前と同じくらい流したんだけど、全く満たされた感じがしない」

「満たされた……って？」

「流した分だけ消費されるような、そんな感じがした」

「何それ……？」

「わかんねえ……。でも、このままじゃ危険だったのはわかる」

つまり、今のリミエラは魔力を流しても流してもそれが体に堪らないってことなんだろうか。勿論魔力が殆どなくても生きている人はいる。が、もしそれがゼロならどうなるんだろうか。

『坊、少年が魔力を流した後、リミエラ嬢の力が大きくなったのを感じた。坊は感じなかったか？』

「いや……あんまり感じなかったかな。でもそれってどういうこと？魔力は溜まってないのに力が大きくなるって？」

『わからぬ。もう一度やればわかるかもしれぬな。頼んでほしい』
「わかった」

「あの……、もしかしてその獣と喋っているのですか？」
「え？あ……」

ヴァオリ先生に声をかけられ、気付く。
しまった。あまりにも普通に話しかけてくるものだから、タマと
会話してしまった。

「えっと……その、一応そうです」

「もしかして……その獣は魔獣なのは？」

「魔獣……？」

「知能の高い魔物のことで、力も強いと言われています」

「一応、妖狐だそうです」

「妖狐っ！？ まさか……お嬢様の腕についている護身具とはその
毛ですか！？」

「はい、そうです」

「まさかそんなことが……」

そう言つとヴァオリ先生は急に黙ってしまった。
焦ったようにまくしたてる先生の姿は今まで見たことがなく、そ
れは僕らの不安を大きく増やすことになる。

先生は少し考えるようにした後、アイカさんに言葉を投げかける。

「お嬢様は……水の季節に生まれたので間違いないですよね？」

「はい。間違いありません」

「そうですか……。失礼ですが、お坊ちゃまとお嬢様は本当にご兄
妹なのですか？」

「それは……」

突然の質問に対し、言葉を詰まらせるアイカさん。

……どうということ？ それって……僕とリミエラは本当の……兄

妹じゃないってこと？

「お嬢様のお体の問題でもありますので、答えていただきたいのですが……」

「……私からはお答え出来かねます」

「それを、答えと受け取らせていただきます」

なんだか知らないうちに話が進んでいくけれど、中身がさっぱり理解できない。

今かなり重大な事実が発覚した感じがするんだけど！

なんだか置いてかれつつある僕に向かって、先生が口を開く。

「お嬢様は……おそらく聖属性の適性をお持ちです」

「聖属性……？」

「はい。少なくともここ数日の不調は、おそらくそれが原因とされます。前回のときもしかしたらそうだったのかもしれませんが」

「ど、どういうことですか！？」

「強い魔力を持った魔獣の影響を身に受け、それを打倒しようと聖属性の魔力が急成長したのでしょう。魔属性の魔力と互いに干渉し合い、幼い身で持つにはあまりに大きすぎる力となってしまったのだと思われます」

「それで……リミエラはどうなるんですか？」

「このままだとその身を削ることになってしまいうでしょう。このようなケースは見たことがないので、正直言って私たちにはもう手が負えません。優秀な魔法医ですらどうすることも出来ないと思います」

「そんな……」

先生は少し遠まわしに言っているが、身を削るということは最悪の場合死ぬこともあり得ると考えた方がいいということだ。

今は血の繋がりがどうかなんて……気にしている場合なんかじゃない。

つまり、僕はリミエラの身を守ろうとタマの護身具を渡したわけだけれど、それが逆にリミエラの命を脅かす最大の原因となっていたわけだ。

……なんてことだ。

この手で守ろうと誓った妹を、自らの手で危険に晒しているなんて。

「なんとか……ならないのかよ！ 親父は医者なんだから！」

「……どうしたらいいのか、わからないんだ」

「普段は患者のためとか言ってるけど、いざ本当に危なくなったらに見捨てるのか！」

「……………」

ミカエラがヴァオリ先生に食ってかかっている。

最初は協力するのをあんなにも嫌がっていたけれど、根が真面目なのか本気で心配してくれている。

どうやら僕は……本当に彼の評価を改めないといけないのかもしれない。

「アイカさん……僕、どうしたらいいのかな……？」

「若様……」

「一人前にリミエラを守ってる気になってさ、それで最終的にはこの様だなんて」

「若様、お嬢様は助からないと決まったわけではないのです」

「え？」

「先生は、助ける方法がわからないと仰っているだけなのです。助けられないのではありません。今からでも、お嬢様を助けてあげればいいじゃないですか」

「……そっか。そうだったね、諦めた気になってごめん」

「状況がどういったものなのか、わからないのでこれからきちんと考えましょう」

「うん。アイカさん、ありがとう」

アイカさんに言われ、気を取り直す。

間に合わないわけではないのだ。助け方がわからないだけで、助ける方法がないとは限らないのだ。リミエラを、どんな困難から守ると誓った以上、この程度で根をあげるなんて許されることじゃなかった。

『坊……今回、我は力になれそうにない』

「わかってる。でも何がどうなるのか、さっぱりわからないんだ。タマにだって全力で協力してもらっよう」

『ああ……。任せておけ』

「頼りにしてる」

少し落ち込んだ様子のタマとそうやり取りをすると、苦しむリミエラの様子を伺う。

するとそこにミカエラ少年が近づいていく。

「……これが原因なんだろう？こんなもの、取っちまえばいいんだ」

「おい！ ミカ！！」

「くっ……！」

そう言うとは彼は、僕らが止める間もなくリミエラの手を取り腕輪を外しにかかる。

油断していたとはいえ、害意がある場合はクソ医者が一撃で倒れるほどの力がかかるはずなのだが、苦しみながらもその手を離さない。

「あああああああ！！！！」

「いやあああああああ！！！！！！」

そして彼がその腕輪を無理矢理外し、同時に吹き飛ばされる。

瞬間、リミエラから凄まじい魔力が放出され――

どおん、という音と共に

――爆発が起きた。

第16話 大きな変化（後書き）

誤字脱字・感想などありましたら気軽に伝えてください。

第17話 家族というもの

「ぐっ……!!」

外まで強く弾き飛ばされた僕は、痛む体を無理矢理起こし、辺りを見回す。

リミエラから流れ出た魔力はまるで台風のような形で辺りを蹂躪していた。

あまりにも強く飛ばされたものだから最初は爆発が起きたのかと思ったのだが、実際に爆発が起きたわけではないようだ。

診断所は半壊していて、中にいた人の多くが巻き込まれていた。吹き飛ばされたことそのものよりも、半壊した診療所の破片などによる2次的災害の方が大きそうだが、今にも死にそうといった重体者は見た感じにないようだった。

そのことに少し安心して、今尚吹き荒れる魔力の渦の中心、リミエラを見る。

「あああああああああ!!」

強い力を制御出来ずに振り回すリミエラは苦痛の声をあげている。その魔力の大きさは、初めてタマと対峙したときと同じく凄まじいもので、思わずたじろぎそうになる。属性が聖属性であるためか、立っていたくなくなるような絶望感というものを感じないが、その単純な力の差を前にどうしたらいいのかわからなくなる。

「なんだよあれ……」

「無事だったのか……良かった……」

「なんで3歳があんな魔力持ってたんだよ!!」

「君にも魔力の大きさがわかるの?」

「あんな力……わからない方がどうかしてる！これじゃまるで……化物だ」

「……………」

その力を一番近くで受けたミカエラが声を荒げる。

魔力というものは他の人には感じにくいものだと思っていたのだが、彼の様子からそれでも尚リミエラの魔力は一般的なそれを超えているのだと理解する。

いつもならリミエラを化物呼ばわりしたことを後悔させてやるどころだが、今の僕にそんな余裕はないし、客観的に見ればそう思われても仕方ない力がリミエラの周りで無差別に暴れている。

近づくだけでも一苦労。少なくともあの力をまともに受けることは出来ないだろう。

『…………坊』

「…………タマ？　大丈夫！？」

『一度に強い聖属性の魔力を身に受けたためか、体の損傷が激しいな…………』

「ここにいっても平気？　無理なら今すぐにでも離れて」

『何、力自体は我の方が強い。が、相手が聖属性とあっては相性が悪すぎる。我は役には立たぬであろう。すまぬ』

「いや…………いいよ。無事ならそれで」

『小さき体だったことも幸いしたな。直撃を避けることが出来た』

息も絶え絶え、といった様子のタマ。

タマは僕が出会った中でも圧倒的と思えるほどの力を持っていた。僕があつた人の絶対数は物凄く少ないものの、それでもその力は大きなものだったと言える。そのタマがこの状態なのだから、それだけ聖属性とは魔属性にとって効果的なだろう。

「アイカさんの姿が見えないんだけど……」

『少し離れたところに倒れていた。気絶はしていたようだが外傷はなかった』

「無事……ってことでいいんだよね。タマ、今のリミエラの状態ってどんなものかわかる？」

『おそらく……だが、私の力に対抗するために強く成長した魔力が行き場を失い溢れ出ているのであろう』

「あの腕輪のこと？」

『ああ。元々は相反するあれを拒絶しようと制御せずともその力を向けていたために外へ出ることはなかったのだろうが……』

「外したからこそ、力を止めることが出来なくなったと」

『そういうことだろう。このまま魔力を放出し続けられればいずれ倒れる……が、かなり危険な状態になってしまはずだ』

「今すぐにも止めないと……か。どうしたらいい」

『リミエラ嬢が魔力を体内に押しとどめるのが一番の策であろう。むしろそれ以外にはないが、今の状態ではとても出来たものではない』

「魔力を抑えるって具体的には？」

『感覚的なものだから伝えづらいが……まずは落ち着いて魔力が流れ出ているのを理解すること。そしてその流れをゆっくりと変えていくといった感じだろう』

そう言っている間にも泣き叫ぶようにリミエラは声をあげ、魔力を放出していく。

その力はまるで風となり、まるで壁となり、周りのものを破壊していく。

多くの人が離れているためか、人的被害は殆ど出ていないようだが、彼らの表情は恐怖に彩られていた。理解の出来ない理不尽な力を前にして、その殆どが……リミエラを恐怖していたのだ。

「……こんなのってないよね。今助けるから、待ってて」

一言、決意を固めるようにそう呟く。

リミエラをこうやって危険に晒したのは僕が原因である以上、どれだけのことをしても償いにはならないかもしれないが、ここでリミエラを止めるのも僕しか存在しない。

近くにいたタマに目で軽く下がるように促し、少し距離の離れてしまったリミエラを見据える。

大きく息を吸い込み足を踏み出そうとした瞬間、横合いから声を掛けられた。

「おい……行くのか？」

「当然。僕はリミエラの兄で、リミエラは僕の妹だから」

「本当の兄妹じゃないかもしれないんだろ？」

「そんなこと、どうでもいいよ。大事なのは血の繋がりなんかじゃない」

「……………」

僕の言葉に何か思うところがあつたのか、少し考えるように黙り込むミカエラ。

そこで、今日再対したときの言葉をふと思い出す。

彼は他人のために尽力する先生を嫌っているような節があつた。

数刻前は、見捨てるような形になってしまったリミエラへの対応に怒りを露わにしていた。

なるほど……。彼が反抗的になっているのは、単純な話でしかなかったわけだ。

「先生は君を大事に思っていないわけじゃないはずだよ」

「は？」

「家族を蔑ろにしてるわけじゃなくて、出来ることを精一杯やって

るってことじゃないかな」

「どういう……ことだよ？」

「それだけ先生がいい医師なんだってことだよ。頼られる機会も多いから、家族に使う時間が少なくなる。それは君にとって裏切りのように思えるかもしれないけど、きつといつかわかると思うよ」

「そんなの……わかんねえよ……！」

タマは診断所の空気がいいものだと言っていた。

病院のような場所は普通、沈んだ空気が流れているものだと思は思ふ。

それだけあそこにいた先生が頑張り、頼られ、そしてその期待に応えてきた結果なんじゃないだろうか。

他人にばかり構ってしまふ先生は、ミカエラにとっていい親ではないのかもしれない。

それでも、僕は彼に、今の僕が持つ気持ちを言葉にして伝える。

「家族ってのはさ、そんなに簡単に切れる絆じゃないんだ」

僕は今日まで過ごしてきた日々のことを思い起こす。

本当の兄妹じゃない可能性はあるみたいだけど、それでも僕らはちゃんと兄妹だった。

一緒に暮らし、一緒に遊び、一緒に笑いあっていた。

今までもそうだったし、これからもうやって一緒に育っていくのだと、そう信じて疑わなかった。

「ミカエラ、よく見ていてほしい。僕は、“家族”を守ってみせるよ」

「……ああ」

僕は初めて彼の名前を口にし、その目を合わせる。

第17話 家族というもの（後書き）

誤字脱字・感想などなどありましたら気軽に伝えてください。

11/3 指摘に伴い一部修正しました。

第18話 "痛み"と犠牲

『坊っ！ 意識を保て！！』

「うつ……！ ああああああ！！！」

激しい痛みに襲われる中、タマが声をかけてくる。

その姿は元の大きさに戻っていて、今まであったタマとの繋がりが突然希薄になったように感じる。

『仕方ない……』

タマが一言そう呟いた途端、感じていた痛みがまるで嘘だったかの如く引いた。

前に一度、逆のことをされたことを思い出す。おそらく幻覚の応用なのだろう。

痛みを伴う幻覚を起こすことが出来るように、痛みなどないかのように感じさせることも出来るのだと考えた。

そうして少し落ち着いた後、右腕を見る。

そこには大きなタマの毛の塊が巻かれていて、まるで僅かに発光しているかのように感じる。

「……これは？」

『我の尾だ』

「尻尾？」

そう言われ心なしか小さくなったように感じるタマの尻尾に目を向ける。

以前は5本あったそれが、1本少なくなり4本になっているのが確認出来た。

「……どうということ？ 説明して」

『今はそんなことをしている暇はない。あくまで痛覚を消しているだけで怪我が治っているわけではないのだ。出血もまずい』

「そうだね……。ミカエラ！ 君は氷の魔法って使える？」

今の状態がどうということなのかを聞こうとしたところで、それよりも僕の状態がまずいということに気付かされ応急の対処法を考える。

今まで啞然としていたミカエラは、僕のその声でようやく意識を復活させたのか大きく叫んだ。

「おおおお前！ そ、そいつなんだよ！！？」

「何って……タマは妖狐だって言っただけだよ？ そんなことより、使えるの？」

「そんなこと……」

「どうなの？」

「使えないことはないけど……今はかなりキツイ」

「無理してでもいいから僕の腕を凍らせて。最悪表面だけでもいいから」

「無茶言うんじゃないよ。……少し時間くれ」

「わかった」

始めは動揺していたようだったミカエラは、数度会話を重ねると無理矢理納得させたのか僕の言葉を聞いてくれた。

少々荒い形になってしまったが、切断面を凍らせないと本格的にまずい。

痛みがないだけにどれだけまずいのが全くわからないというのも問題だった。

最悪ではないのは痛覚が麻痺しているせいでそれほど危機感とい

うのを感じないこと。この状況でパニックになって動けなくなった
りするよりは幾分ましと言えた。

「今のうちに説明して」

『そう睨むな』

「これは何？ どういうことなの？」

『リミエラ嬢の聖属性魔力がこの場を支配している以上、我の幻覚
はかなり弱くなってしまふ。おそらくかけてからすぐに消えてしま
うだろう』

「つまり、これはそれを抑えるための方法ってこと？」

『ああ。我の力を象徴する尾を利用し主に幻覚をかけた。これなら
まだしばらくは持つはずだ』

「それで……その状態になった君のデメリットは？」

『……力がかなり弱くなったな』

「そうだろうね……。なんとなく威圧感が減った感じがするよ」

『だが、坊はそんなことを言っている余裕なんてないのだ。我のこ
とは気にするな』

「いや……でも……」

『より危険なのは我よりも坊だということを自覚しろ』

「……わかった。ありがとう」

「準備、出来たぞ」

おそろく話が終わるのを待っていてくれたのだろう。

ミカエラはその身に僅かな魔力の流れを保ちながら僕に声を掛け
てくれる。

「マナの支配が強すぎる。効果にはあんまり期待するなよ」

「わかった。元々応急対処でしかないし、そこまで期待しないこと
にするよ」

「お前な……。いや軽口が言えるだけまだましか」

軽く笑みを向けながら彼にそう言うと、少し心配されてしまった。
ショックを受けそうになるからもう腕の方は見てないけど、ミカ
エラにそうさせるほど、僕の状態は悪いのかもしれない。

「いくぞ。――水の力を溜めし我が力を使い、氷の力を顕現させる
！>氷結く――！」
リリース

彼がそう発言した瞬間、魔力の流れが大きく変わり、タマの尻尾
が巻かれた右腕全体が氷に包まれる。

前に魔法を使った時は、不意打ちの意味もあつたのか発動鍵コマンドキーのみ
の思考詠唱だったのだが、今回は力を強く使ってくれたのか口述詠
唱で行ってくれた。

期待するなとか言っておいて、こうやって適度な力を出してくれ
る。

僕と僅かに半年ほどしか変わらないにも関わらず、こうやって力
をきちんと扱うことが出来る。

これはどうしたって期待してしまうものなのかもしれないな。
親ならば尚更なのだろう。ヴァオリ先生の気持ちがいさしわかるよ
うな気がする。

「お前の妹に、マナを支配されたら効果がなくなる！早くしろ！」
「っ！？」わかった――！」

思わず感心しているとそう叱咤され走り出す。

マナを支配されるということは、彼の魔力との結合が断たれる、
ということなのだろう。

……断たれる？
そこでふと足を止める。

「おい！ どうしたんだよ！！」

「タマ！ リミエラの魔力は強いけど、魔断出来ると思う！？」

「……絶対とは言わぬ。が、妨害する程度のことは出来るだろう」

「十分だ！」

『坊、待て！』

一度タマに確認を取り、再び走りだそうとする。

その瞬間静止の言葉を掛けられ、再度足を止め振りかえる。

「わっ！？」

『身につける。一度くらいなら身代わりに出来るはずだ』

「これ……また尻尾！？」

『もうこれ以上我が手を貸せることは殆どない』

「くそっ！ 僕のためにお前が危険になってどうするんだ！」

『先ほども言っただろう。今は我よりも坊の方が危険なのだ。自覚しろ！！』

「これ以上やったら……本気で怒るからな！」

『もうギリギリの状態だ。安心しろ』

「安心出来るわけないだろ……。でも、ありがと。助かるよっ」

『早く行け』

「ああ！」

受け取った尻尾を左手だけで無理矢理首に巻きつけ、今度こそ走り出す。

左腕だけに魔力を集中させ、無差別に向かって来るリミエラの魔力を叩き落していく。

「くそっ……！ きつついな……」

タマとの繋がりが断たれたためか、もしくはタマ自体の力が減っ

たからか、少し前よりも弱くなった力を無駄なく使えるよう集中する。

その間もどうか前に進んでいくため精神力をかなり消耗しているのがわかる。

また、結局は力技でしかないとためその全てを叩くことは出来ず、少しずつダメージを蓄積していく。痛覚を感じないためどれほどダメージを受けたのが全く理解できない。

かなりの距離を縮め、再度リミエラに声をかける。

今度は言葉を投げかけるように。

「リミエラ！ 落ち着いて！ 今、助けるから！！」

「にーさまっ……！！」

僕が声をかけたその一瞬、リミエラが泣きそうな表情をする。

これだけの状況で不安にならない方がおかしいと思う。

リミエラはまだ、僅か3歳の子どものものだ。

一人で不安だっただろう。心細かっただろう。でも、もう心配しなくていい。

「待ってて、今すぐ行くから。君の兄に、全部任せて」

「あに……。にーさまあああああ！！！！」

まるで泣き叫ぶかのように助けを求めるリミエラの声と共に、僕に向かって大きな力が襲ってくる。

その力の強さに一瞬たじろぎそうになるが、リミエラを見つめながら笑ってみせる。

こんなもの、リミエラの痛みに比べればなんてことない。叩き落してやる。

ハッピーエンド
今からでも遅くない。最高の結末を迎えようじゃないか。

第18話 "痛み"と犠牲（後書き）

誤字脱字・感想などありましたら気軽に伝えてください。

第19話 兄妹

まるで壁のように襲ってくるリミエラの魔力を、軽くかわすようにしながら左腕に集めた魔力で叩き落す。

弱くなったその力を、出来る限り無駄なく、効果的に使っていく。数メートル。その僅かな距離を進むことに全神経を使い、リミエラの元へと駆ける。

「リミエラ、まずは落ち着くんだ。自分の力を怖がる必要はないから」

「は、はい……」

少しずつ距離を詰め、魔力を捌きながらリミエラに声をかける。よくよく見れば、この魔力はリミエラを中心にして渦巻いているが、だからこそリミエラの周りでは何も破壊跡が見られない。

暴走した魔力は、それでも尚、無意識的にリミエラを守るためにしか使われていないのだろう。

「まずは深く息を吸って、頭の中を空っぽにする。今の状態を全部忘れて、いつも通りにしてみよう」

「んっ……すうっ……はぁ……。ううっ……むずかしいです……」

不安に押しつぶされそうな環境の中でそれを求めるのは少しきつかったかもしれない。今にも涙を流しそうな上目遣いでリミエラは僕を見つめる。

「わかった。ちょっとだけ待っててね」
「？」

一言そう伝え、周囲の状況を素早く観察する。

渦巻く魔力の抜け道を探し、流れに身を任せ、可能な限り直線的にリミエラとの距離を一気に詰める。

リミエラの元へと辿り着いた瞬間、勢いのまま左手でリミエラを軽く抱きしめる。

「待たせてごめんね、不安だったよね。もう安心していいよ。僕がリミエラを守るから」

「うつ……にーさまあ……！」

するとリミエラは堪えていた涙を抑えられなかったのか、力強く僕を抱き返しながら嗚咽を漏らす。

未だ荒れたままの魔力が背後から襲ってくるのを感じたが、今はリミエラの不安を取り除くのが最優先だ。僕は覚悟を決め、それを――敢えて無視する。

ぱぁん、と首元から一瞬大きな音がしたかと思うと、リミエラの手を離れ、乱れていた魔力の殆どが消え去ったように感じた。

一度助かるくらいでいいと思ったんだけど、これは後でタマに全力で感謝しないといけないな。かなりの効果だ。

この状態がいつまで続くかわからない。最初で最後のチャンスだ。リミエラに魔力の制御を教える。それがこの場を収めるために、僕に出来る精一杯。

制御の仕方なんて実際はわからないけど、僕は魔力の流れを見ることが出来る。その力だけで、リミエラを守ってみせる。

抱きしめていたリミエラを少しだけ離し、目もとの涙を手で軽く拭きとる。

「リミエラ、よく聞いて」

「ぐすっ……はい」

「今暴れているのはリミエラ自身の魔力だ。それが自分の物だとい

うことをよく感じて」

「ん……」

「自分の中から何か力が流れ出ているのはわかるかな？」

「はい」

「それを、まずは少しずつ自分の使えるものだとして認識する。何度も言うようだけど、それはリミエラの力だ。望めばちゃんと意思通りに動いてくれるはずだよ」

「なんとなく……わかります」

リミエラがそう言うのと、続いていた魔力の奔流が少しだけ変わったように感じた。

しかしそれでも、リミエラの意味を外れた魔力が、僕を排除しようとする。

襲いかかる魔力からリミエラを守るように立ち、左腕を全力で振り抜く。

瞬間、魔力の使いすぎのせいか力が抜けていくのを感じるが、気を振り絞りリミエラに笑いかける。

「にーさま！ ごめんなさい……」

「全部を押さえ付けようと思わなくていいよ。リミエラが扱い切れなかった分は僕が全部叩き落してあげる」

「で……でもっ！」

「君の兄はこんなことくらいじゃ倒れない。安心してね」

「にーさま……でも……っ！」

そこで再び泣きそうな目を僕に向けるリミエラ。

絞り出すように、心の奥底からきた不安を象徴するかのよう、爆発的に吐露されたその次の言葉に、衝撃を受ける。

「にーさまは、わたしのほんとうのにーさまでは……ないですよ」

ね……？」

それを受け、思わず絶句してしまう。

診察室での会話が聞こえていたのだろう。それはおそらく、自分は独りなのかもしれないという不安で、同時に僕が独りなのかもしれないという不安なのだろう。今まで家族として、兄妹として育った僕らが引き裂かれることに対する不安。

僕らを繋ぐものが何一つとしてなかったと知ったりリミエラは、だからこそ僕を一度拒絶せざるを得なかったのだろう。

そこで僕は、言葉を止めたことで、より一層不安そうな表情をしているリミエラを一度撫で、諭すように声をかけていく。

「リミエラ、僕と一緒に過ごした日のことを思い出せる？」

「あたりまえですっ！」

「それは……僕らが本当の兄妹じゃなかったから、消えてしまうものなのかな？」

「そんなことっ……！」

「そう、僕らは確かに血が繋がっていないのかもしれない。でもそれは、僕らが今まで過ごしてきた日々を否定するものじゃないんだよ」

「にーさま……」

「リミエラ、僕は確かに君の兄で、君は確かに僕の妹だ。そこに血の繋がりがなんて関係ない。僕らがそう思っていることが、一番大切なんだよ」

「にーさまっ！ にーさまあー！」

「不安になんて思わなくていい。兄は妹を、僕はリミエラを、全力で守るから」

今度は自ら、僕の胸の中へと飛び込み抱きついてきたリミエラは、今まで抑えていた感情を全てさらけ出すかのように、泣いた。

先ほどまでの気丈な、今にも泣きそうなのを我慢するような表情を一切見せることなく、僕の最も近い場所で、泣いたのだった。

これは僅か3歳の子どもが、持っていていいような不安じゃない。こんな状況にしまった僕自身を責め、そしてこれからはリミエラが泣くことなど2度とないようにと決意する。

——その時、リミエラがその衝動を感情に任せ泣き叫んだからか、魔力の流れが大きく変わったのを理解した。

その力は、無差別に周りを蹂躪し、そしてまるで標的を見つけたかの如く僕へと向かってきたのだった。

心の中では、ああ困ったな、もうこの量を凌ぐような魔力なんて残っていないのに、と思いつつも最後まで足掻くことをやめない。

リミエラを軽く押し出すように離すことで、僕のみへとその力を集中させる。

「——え？」

「ごめんね」

僕が自分を離れた、そのことが理解できないといった表情を一瞬だけ見せたリミエラは、瞬時に状況を理解し、そして叫ぶ。

「にーさまあああああああ！！！！」

それはまるで、後ろに凶暴な野獣が口を開けて僕を噛み千切ろうとした瞬間のように見えたことだろう。

それほどまでに絶対的で、暴力的な力が僕を襲っていると自覚できる。

死ぬ瞬間は本当に色々なことを感じる——考えるではなく、感じる——ことが出来るのだと思い、最後の気力を振り絞り、左腕に魔力を集め、振り抜こうとした。

その瞬間、パリン——と音を立て右腕の氷が砕けたことに気付く。振り切ろうとしていた左腕を意思の力でねじ伏せ、本能のみで右腕を振り回す。

傍目から見ればバランスの悪い、ただの道化でしかなかっただろうその行動は、ぱあんという音と、大きな光と共に、その役目を終えた。

ああ——“切り札”はここにもあったのだ。

考えた行動ではなかったが、ギリギリの状況で自分のしたことを、その後に理解する。

一部が赤く染まる白の雨。

目の前でゆっくりと散るそれは、幻覚に使われたタマの尾だ。

僕は、壮絶な、あまりに壮絶な痛みに声をあげることも出来ぬまま、対抗した勢いを殺すことができずにリミエラの方へと倒れこむ。

僕は僅かに残る意識の中、何かを叫ぶように口を開いているリミエラの頭を左腕で抱え込み、そこで気を失ったのだった。

第19話 兄妹（後書き）

誤字脱字・感想などありましたら気軽に伝えてください。

11/3 脱字がありましたので修正しました。

第20話 わからないこと（ミカエラ）（前書き）

少し私用が重なってしまつて、PCを触る時間が取れませんでした。
すみません。

今日明日でどうにかまとめられたらいいな……。

第20話 わからないこと（ミカエラ）

4歳の頃から母さんが魔法の使い方を教えてくれた。

使えることと教えることは全然別のことだ、と言って実際に使ってみせてもらったことは1度もなかった。見たこともない魔法を想像するのはかなり大変だったけど、そのお陰から歳になった頃には適正魔法ならかなり使えるようになった。

だから街の子どもで、俺に勝てるやつなんていなかった。

俺と同じくらいの年で魔法が使えるやつなんてほとんどいなかったし、単純なやつばかりだから普通に喧嘩しても負けることはなかった。

街の外れには領主の館があつて、そこには俺と同じくらいの子どもがいるらしいと母さんに聞いていたけど、どうせそいつらもたいしたことないと思つてたんだ。

そいつらに初めて会つたのは夏のこと。

親父に無理矢理連れられ、病室に着くとそこにいたのは2人の兄妹とメイド。

そこで妹の方に魔力を流せと言われた。

親父は自分の家族には何もしない癖に、他の奴らには何でもするような奴だ。

家の中で診断所を開いてるからたいい家にはいるけど、居間のある2階に上がってくることはほとんどない。まともに両親の会話を聞いたのはいつだっただろうか。

そんな親父が俺は好きじゃない。

母さんはいつも笑つて、お父さんは頑張つてるの、と言うけど、母さんのことを放りだして仕事しかない親父のことを好きになれるわけがない。

そんなことをいつも思っていたから、親父にやれと言われたとき、何も考えずに断った。

そしたら、今までへらへらと笑っていた兄の方が突然キレ始めた。最初は意味分かんなくて関わり合いになりたくなんてなかったが、向こうが喧嘩を吹っ掛けてきた。実力がないから逃げるのか、と。

俺の実力が足りないから出来ないとか思われるのは嫌だった。それは俺に魔法を教えてくれた母さんを侮辱することだ。

後で土下座させることを約束させ、妹の方に魔力を流す。

悔しいが兄の言っていた通り、こんなにかわいい子が苦しんでいるのは辛いものがある。

魔力の使い方は、ほとんど自力で覚えたものだ。こればかりは想像じゃどうにもならなかったけど、何度も何度も魔法を使って、自分の力がどう使われるのかを感じ取るようにしなさいと何度も何度も言われ、そうしてようやく身に付けたものだった。

出来るようになったときは歓喜した。普段は笑いながら無茶なことばかり言う母さんも、このときばかりは普段と違う笑みを浮かべて喜んでくれた。

やっぱり俺は他の奴らなんかと違う。特別なんだとそう思って疑わなかった。

妹の症状が弱まり、落ち着いていくのがわかる。

ほらみる、これくらい俺なら余裕だ。

そんな俺に感謝することもなく、気に食わない兄が帰ろうとした本気で殺されたいらしかったので、街の奴らとの喧嘩じゃあまり使わないようにしている思考詠唱の魔法でぼこにしてやるつもりだった。

何が起ったのか、さっぱりわからなかった。

俺が魔法を発動し、駆けながら奴に向けて放った。畳みかけるた

めに次の魔法の詠唱も始めていた。

速さを重視した最初の魔法が、素手で振り払われ、一瞬頭の中がからっぽになる。

詠唱が止まり、魔法の発動が出来なくなった。しまったと思ったときにはすでに地面に倒されていた。

俺を見下ろすように、見下すように、兄が目の前に立つ。

正体不明の恐怖が俺を襲う。

殺してやる……！ という気持ちでどうにか睨みつけてもどこ吹く風で、奴は平然と帰って行った。

その後、俺は母さんにもっと魔法を教えてくださいと頼み込んだ。急にどうしたのかと聞かれたから正直に答えたら、教えないと言われてしまった。

元々俺が喧嘩に魔法を使うことが嫌だったらしく、ここ最近ばかり教えてもらっていなかったから、予想していた結果でもあった。仕方なく家の本を漁り、どんな魔法があるのか調べ、想像し、実際に使ってみたりして自力で魔法を覚えていった。

今度来たときは絶対に痛めつけてやる、と意気込み毎日訓練を続けた。

それでもあいつを倒す方法が全く思いつかず、徐々に自信をなくしていく日が続いた。

そして“その日”はやってきた。

再び親父に無理矢理連れられ、奴の前に立つ。

少し前から成長はしたはずだが、未だに何故か敵う気がしない。

精一杯虚勢を張って睨みつけると、奴は頭を下げてきた。

前もそうだったけど、こいつは妹のためだけに全部やってるんだと思い知らされた。

親父とは違って家族を大切にしていることを、少しだけ見直した。

前と同じようにやってくれと言われ、その通りにする。

すると、魔力が吸い取られていくような、不思議な感覚がした。

思わず愚痴をこぼし、奴に当たる。

妹を悪く言ったことに対し奴は怒ったがメイドに諭されていた。

その後、どういった感じだったのかを説明する。

少し考えるように黙った奴は、いきなり独り言を言い始めた。

親父が指摘することで、ようやくそれが肩に乗っていた獣と会話していたのだと知らされる。

妖狐つてのはよくわからなかったが、その後の話はわかった。

奴は恐怖のシスコン大王だけど、妹とは血が繋がっていないらしい。

親父はそれを聞いて、匙を投げた。

ふざけるなよ……！

妹の方の左腕に付けられた腕輪が原因って言ってたから、それを無理矢理外してやる。

その瞬間、爆発かと思うほど大きな衝撃を受けた。

——意味がわからない。

兄の方も規格外だったが、妹の方はそれを超えて化物だ。

思わず呟いた俺の言葉に、兄は何も反応しなかった。

俺の言葉に気付かなかったのか、無視したのかはわからなかったが、その後奴は少し弱った様子の獣と会話を始めた。

獣が本当に喋っていることにも驚いたが、あいつが妹を助けようとしているのを聞き、思わず声をかける。

本当の妹じゃなかったのに、それでもお前は行くのか？

当然だ、とばかりに奴が答えた。そして付け加えるように、親父のことを話す。

何も知らないやつが言うな！と言おうとしたが、いつもと違う雰

困気に、なんだかのまれそうになる。

「ミカエラ、よく見ていてほしい。僕は、“家族”を守ってみせるよ」

初めて俺の名前を呼んだ奴―リオン―は、妹の方へ駆け、すぐさま吹き飛ばされていた。

おいおい…… かつこ悪いな…… と思いつつ吹き飛ばされた奴を見ると右腕がなくなっていた。思わず言葉を失う。そして獣が大きな姿になっていることにも気付いた。

氷の魔法が必要だと言われ、荒れ狂うマナをなんとか制御し準備を整える。

口述詠唱でしっかりと魔法を使い、効果が持たないことを説明した。

直後、駆けようとした奴が止まり、獣と少しやりとりをしていた。そんなこといいからさっさと行けよ――！

ようやく走り出した奴は、左腕を変に振り回し、変な動きをしながら妹に近づいていく。

どうにか辿り着いたとき、奴の首元が大きく弾けたかと思うと白い毛が舞った。

周りの魔力が大きく減ったのを感じた。

近くにいる獣の姿を俺は一度確認し、少し前に奴と交わしていた会話を思い出す。

あれは身代わりみたいなものなんだろうと思い、相変わらず規格外の状況を見つめる。

奴が妹を諭し、抱きつかれた瞬間、爆発的な力が再び復活した。さっきと同じように左腕を振り回そうとした奴は、その瞬間何を思ったのか、俺が氷漬けにした右腕を前に出した。

そこで奴の右腕を覆っていた氷が完全に割れ、大きな音と白い光

が辺りを覆う。

気付いた時には兄妹は倒れていて、兄の方は右腕から大量に出血していた。

「にーさま……？ いやあああああああああ……！！？」

——妹が泣き叫び、奴を強く抱きしめたその瞬間。
さっきより大きな光が、奴を覆った——

「くっ……！ なんだ……！？」

あまりの眩しさに目を瞑る。

そして目を開けた瞬間に飛び込んできたのは信じられない光景だった。

さっきまで暴れまわっていた妹は、気を失うように倒れ。
さっきまで血の止まらなかった兄は、右腕の傷が塞がっていて。
何が起きたのか、漠然と感じるものの、驚愕のあまり言葉を失う。

「ミカエラ、手伝え！ 家に運ぶぞ……！」

「は？」

「いいから……！」

「くそっ……わかったよ……！！！」

普段は滅多に慌てない親父が、そう俺を急かす。

あの2人が危険な状態なのはわかっていたし、すぐに行動を始めた……ところで気付いた。——家、壊れてんだけど……。

親父と2人で兄妹を背負い、半壊した家に辿り着く。

そこには普段と変わらぬ笑みを浮かべた母さんが立っていた。
母さん……ちよっとは慌ててくれよ……。

「サリ、急患だ！ 力を貸してくれ！！」

「あら……あなたでは手に負えないの？」

「ああ……私ではおそらく何も出来ないだろう」

「……そう」

親父が母さんに頼み込むようにすると、少し真剣な表情になった母さんが兄妹に触れていく。

もしかして母さんが魔法を使って治療するのだろうか。
今まで見たことがない光景に啞然とする。

「……こっちの女の子は大丈夫。魔力の使い過ぎで倒れているだけで落ち着いているわ」

「そうか……」

「こっちの男の子は……私にもよくわからないわ」

「なんだと……？ どういうことだ？」

「大きな怪我だったんでしょう。体の血がとても少なくなっているわ。でも、それだけ」

「それだけ……だと……？」

母さんが話している内容がまったくわからない。

あの状況でその程度のはずがないのに。

「ええ。外傷は他にないし、血がかなり減っている以外に問題が見られない。どうしたらこんなことになるの？」

「いや……私にもよくわからない。その子が何かをした……ように見えた」

「輸血をして、寝かせるしかないようね。私に出来るのはここまでよ」

「ありがとう、助かった」

「助かったのはあなたじゃないわ。この子を助けるのが、あなたよ」
「……わかってる」

そう呟いた親父は、普段より少し険しい、医師の顔をしていた。

第20話 わからないこと（ミカエラ）（後書き）

誤字脱字・感想などありましたら気軽に伝えてください。

第21話 目覚め（前書き）

かなり間を開けてしまつて申し訳ありませんでした。
ペー入は落ちると思いますが、執筆を再開します。

第21話 目覚め

——ありがとう。

そう言う“彼女”は、優しい笑みを浮かべていた。

——よく頑張ってくれたから、少しだけサービスをしてあげるね。

その澄んだ蒼い瞳は、吸い込まれそうなほど美しく、綺麗だった。

「んっ……」

目を開けると、見慣れた天井。

薄暗く差す夕陽の光ですらまぶしく、思わず瞬きを繰り返す。

まるであの光景が嘘だったのかのような現状に、少し戸惑いを覚えた。

しかし、腕を付いて起き上がろうとしたところで体勢を崩し、気付く。

斬られる、というよりも消滅した、と言った方が正しかっただろうか。無くした右手があの時起きたことは全て本当のことだったのだと僕に認識させる。

それにしても、なんで僕の部屋にいるんだろうか。

「あら……？ 目、覚めたかしら？」

がちやり、とドアを開け入ってきたのは知らない女性だった。

「あの……あなたは？」

「ああ、そうね。君には自己紹介、してなかったわね」

その人はくすりと笑い、軽くお辞儀をしながら僕の問いに答える。

「サリィヴァオリよ。亭主と息子がお世話になってます」

「先生の奥さん……ですか」

「ええ。家が半壊してしまったから、今はこちらに住まわせてもらっているの」

「それは……すみませんでした」

「別に家くらい壊れたって問題ないわ。それより、少し診るからじつとしててね」

いや家が壊れたら大問題じゃないのか？と思いつつも、サリさんの言う通りにする。

背中を支えてもらい、上半身だけ体を起こす。壁に背を預けるように座りなおした。

「……………」

「あの……何を？」

「動かないでね」

「え？はい」

サリさんは目を瞑りながら僕の体を数か所触っていく。ぼんやりと光っているように見えるのは魔法を使っているからだろうか。

「調子や気分が悪い、ということはないかしら？」

「今は特に感じません」

「体に違和感はない？」

「右腕に……………」

「まあそれは仕方ないわね。痛みはない？」

「ありません」

「そう、なら安心していいと思うわ。神子様が治してくれたのだもの」

「え？」

「そのうちわかるわ」

くすりと含むように笑うサリさん。

“みこ”様というのは何だろうかと思ったが、口にする前に先手を打たれてしまった。

仕方がないので気になることを聞いてこうかな。

「それで……リミエラは？」

「あら、最初に聞くのがそれなのね」

「他のことは後でも聞けることなので」

「大丈夫よ。君よりも早く起きているわ。お兄様に会いに行こうと騒いでいるのが少し問題だけだね」

「そうですか……本当に良かった……」

「本当に、大事なのね」

ふふつと軽く笑みを浮かべ、サリさんが離れる。

「それで……あの後どうなったんですか？」

「うーん……詳しいことはわからないの。私にとってはあなたたち2人が運ばれてきたただだったからね」

「そうですか……」

「まああまり気にしても仕方ないと思うの。今生きてるってというのが奇跡なんだから、それだけで十分なことだと思わない？」

「奇跡って……いや確かに、そうかもしれないけど」

「そうそう。君は幸せ者だ」

なんだかよくわからないまま煙に巻かれてしまったけれど、うん
うんと頷いているサリさんを見ているとなんだかそれでいいような
気もしてしまう。不思議だ。

それにしても……話し始めたときのイメージはもつと落ち着いた
感じの人なのかと思ったけど、結構面白い人だな。

「それじゃあ、君が起きたことを伝えてくるわね。さすがに眠くは
ないでしょう？」

「さすがに……って、どれくらい経ったんですか？」

「3日」

「……え？」

「私が初めて君を診たのは3日前、ということよ」

「3日も……」

「そうよ、お腹も空いているでしょう。何か持ってきてもらうわね」

「……はい、お願いします」

「それじゃあ、問題ないと思うけど、念のためあまり動かないよ
うにね」

そう言ってサリさんは出ていった。

静かになってしまった部屋で、現状わかっていることをまとめて
いく。

リミエラはあの後、何事もなかったということが一番大きな収穫
だ。そうでなければ、僕はあの時何も出来ていないということなの
だから。

次に、おそらく僕の右腕は治ることはないのだろうと思う。サリ
さんは魔法を使って僕を診察しているようだったし、治せるのなら
既に治しているはずだ。

そして、僕の力は物凄く落ちたのだろう、という実感がある。そ
れは僕が無理をしすぎた影響なのか、未だ感じる事が出来ないタ

マの影響なのか、その辺りはわからないが、後々わかることだろう。
最後に……………お腹すいた。

「にーさまっ！」

唐突に、ばんっ！と大きな音を立てて部屋のドアが勢いよく開かれる。

そこにいたのは当然のようにリミエラで、後ろにはアイカさんもいる。リミエラはそのままの勢いで僕の胸元まで飛び込んできた。

「リミエラ、あまり無理しちゃダメだよ」

「で、でも……………にーさまが……………！」

「大丈夫、逃げたりなんかしないし、いなくなったりもしないよ」

「はい、ごめんなさい……………」

「うん、リミエラはいい子だね」

リミエラを左腕で抱え込むようにしつつ、軽く諭す。

元気なのがわかったからいいんだけどね。少ししよげているリミエラはかわいいし。

「にーさま……………」

「ん？ ああ、これね。リミエラが気にすることじゃないよ」

「でもっ……………！」

「リミエラさえ無事なら、腕の1本や2本、安いものだよ」

リミエラが僕の腕に気付くと、自分でやってしまったことを思い出したのか、悔いるように見つめてきた。

確かに手がなくなっただのは辛いことだけど、さつきサリさんにも言われたように、あの状況で生きていられただけでもうけものだ。

リミエラが無事で、僕が生きている。それだけでもう十分だと思

えた。

「若様、お食事を持ってきました。お嬢様、そのままだと若様が動けませんよ」

「ありがとうございます、アイカさん」

「う……はい、わかりました」

勢いよく開けられたドアをゆっくりと閉じ、少し様子を見るようにしていたアイカさんが声をかけてくれる。

おそらく2人はサリさんに僕が起きたことを知らされたのだろう。簡単な食事をアイカさんが作ってくれたみたいだった。

「お嬢様、そんなにがっかりしないでください」

「でも……」

「若様は食べるのが少し大変かもしれませんがね。手伝ってあげたらいかがでしょう」

「っ！ わかりました！」

くすりと笑ったアイカさんは、僕の横にお粥を置くとリミエラにれんげを持たせ、僕に食べさせるよう促す。

「にーさま、どうぞ！」

「お嬢様、そのままでは熱くて食べにくいですよ」

「うっ……」

「少しふーっと冷ましてあげてください」

「ふっー！ ふっー！」

必死に息を吹きかけるリミエラ、マジかわいいです。アイカさん
いい仕事しますね！

そんな視線で2人を見つめていると、アイカさんがこっちを見て

にこりと笑った。

手のひらの上で踊らされてる気分です……。

「ん……、にーさま、食べられますか？」

「うん、ありがとうリミエラ」

「あーん、してください」

「……あーん」

「どうですか!？」

「とてもおいしいよ」

「ほんとですか!？ もっとたべさせてあげます!」

少し興奮した様子のリミエラは、その後何度も僕にお粥を食べさせてくれた。

一通り食べ終わると、アイカさんが再び声をかける。

「お嬢様、そろそろ戻りますよ」

「いやですつ、にーさまといっしょがいいです!」

「お嬢様も病み上がりですから、きちんとお休みになってください。若様もまだお疲れなですよ?」

「むーっ!」

「リミエラ、また明日、遊んであげるから。今日はもう戻っておとなしくしててね」

「にーさま……」

「お粥、おいしかったよ。また明日の朝、お願い出来るかな?」

「はいっ!」

「それじゃあ、今日はもう休んで朝起きようね」

「わかりました。にーさま、またあした、です!」

「うん、また明日ね」

「それでは若様、失礼します」

このままだとリミエラは僕のそばを離れそうになかったので、明日に約束をすることで一度離れてもらう。

アイカさんも言っていたけど、リミエラ自身も病み上がりなのだ。あまり無理はさせたくない。

3日も寝ていたから眠くないと思っていたのだけれど、なんだか眠気が襲ってくる。

リミエラの姿を見て安心したからか、3日寝ていて尚、体が休息を求めているのか。

睡魔に打ち勝つことが出来ぬまま、僕はゆっくりと目を閉じた。

第21話 目覚め（後書き）

誤字脱字・感想などありましたら気軽に伝えてください。

第22話 日常（前書き）

解説枠（？）になるはずだったのにどうしたことなの……？

サブタイトルいいのが思いつきませんでしたw

結局かなり時間をかけたけど別作も大してまとまっていけない罨。難
しいです。

第22話 日常

サーっとカーテンがひかれる音で目を覚ます。

そこに立つのは普段通りメイド服を見事に着こなしたアイカさん。遮光カーテンの隙間から覗く日差しが生き生きと働くアイカさんを照らしつけ、その姿を一層映えさせていた。

リミエラが天使と例えるなら、アイカさんは女神といったところだろうか。

「若様、おはようございます」

「おはようございます、女神さま」

「え？」

振り返って笑顔で声をかけてくれるアイカさんに、考えていたことをつい言ってしまった。やばい、この空気なんとかしてくれ。

「……じよ、冗談ですよ」

「冗談でも、そういう言い方は関心しませんよ？ でも冗談が言えるのなら体調は良さそうですね。体は起こせますか？」

「すみません。体は……なんとか平気そうです」

「それでは一度着替えて、降りてきてくださいね。朝食の用意が出来ています」

苦し紛れに言い訳をしたら怒られてしまった。アイカさんが綺麗なのは冗談でもなんでもないんだだけだね。

よく考えてみたら、転生してから会った中で一番綺麗なんじゃないだろうか。母上やリミエラは身内だから除外するとして、他に思い当たる女性がない。

この家には、スサナさんという使用人さんがいるんだけど、あの

人はあんまり会いたくない部類の人だから出来るだけ会わないようにしていたし、昨日のサリさんは先生の奥さんだし。アイ力さんが僕の支えです。

とまあ、そんなどうでもいいことを考えながら着替えを終え、下の階に降りた。

「父上、母上、おはようございます」

「おはようリオン。調子はどうだ？」

「少し疲れている他は、特に問題ありません」

「そうか。本当に良かった……」

「ご心配をおかけしました。母上も、すみませんでした」

「リオンが無事なら他のことはどうでもいいわ。よく頑張ったわね」
「ありがとうございます。それで、リミエラは？」

両親に軽く挨拶をし、リミエラを探す。どうやらまだ降りてきていないようだけど……。

「アイ力に一度起こしてもらったのだけど、また寝てしまったようね」

「そうですか」

朝食時に約束をしたんだけど……それなら仕方がないかな。
起きてから少し、怒られるかもしれないな。

「まだ病み上がりだし、疲れているのよ。またあとで起こしてあげましょう」

「……そうですね、わかりました」

「二人とも、朝食にしようか」

父上がそう声をかけたので、僕は食卓へと着く。

そこでふと気付いたことを聞いてみる。

「あの……サリさんたちは？」

「彼女たちは、一度ヴァオリ先生の様子を見に行くと朝出かけたよ」

「ヴァオリ先生はこっちにいたわけではなかったんですか？」

「先生の奥さんとお子さんだけだ。先生は街に臨時の診療所を作って患者さんを診ている」

「なるほど……」

「3日前に怪我した人もいたようだったからな」

「それは……すみません」

「いや、責めているわけではないんだ。重傷者はいないようだし、そういう意味では良かったとも言える」

例え僕とリミエラの間では終わってしまった過去の話だったとしても、その影響を今も受けている人がいるということを考えると複雑な気持ちになる。

その辺りはきちんと受けとめて、僕も何か出来ることを考えなきゃいけない。

こういつときこそ異世界チートだろうか？ 名産品とか？ 結構難しいな……。

「若様、辛いようでしたら無理しなくても大丈夫ですよ？」

「え？ ああ、違うんだ。食べられるよ」

そうやって考え込んでいたのだが、食事が辛いのではと思ったのかもしれない。アイカさんに心配されてしまった。

3日間食事をしていなかった僕のために作られたミルクスープは、お腹を満たすには少し足りないかなと思ったけれど、美味しく食べやすいものだった。急に食事を増やして吐いてもダメだろうし、これくらいがちょうどいいのかもしれない。

こうやって工夫を凝らして作るのはアイカさんだろうか？ ロンさんは工夫するけど、こういう気を使った料理はあんまりしないイメージがある。あの人は奇をてらった創作料理に心血を注いでいるのだ。

「アイカさん、ありがとうございます。とてもおいしいよ」

「ありがとうございます。ですが無理でしたら残してもいいですからね」

「無理じゃないよ、大丈夫。こんな美味しい食事を残したら怒られちゃうよ」

もったいないお化けに。

「そういえば……タマが見当たらないんだけどどこに行ったかわかる？」

「いや、見ていないな」

「あなたたちが帰って来たときにはいなかったわね」

「私も見ていません」

昨日、今日と全く見かけなかったから聞いてみたんだけど、全員わからないようだった。

そもそも普段から僕のそばにいたから、僕がわからないなら他の人がわからないのは当然かもしれないな。

起きてから……いや正確にはあの事件から、タマの気配が弱くなってしまった。

最初はタマの力自体が弱くなっただけなのかと思っていたんだけど、今この状態で、父上や母上から感じる魔力が小さくなっていることに気付いた。

リミエラは前よりも大きく……かなり大きくなっているんだけど、他が弱くなったというのはタマがいないことと関連性があるのかも

しない。

僕の力は、タマと契約したことによって伸びたものだったはずだ。元々魔力を感じることは出来ていたけど、それが強くなったのはタマと契約してからだった。

それがタマ自身の力だったのか、それとも僕の力が契約によって強くなったのかはわからないけど、それでも契約の影響で僕に変化があったことは間違いない。

確か契約刻印は体に刻まれるものと言っていた。つまりそれがなくなったら、僕とタマとの契約は途絶えた、ということ……だろうが。

あんなに命を張らせて、はいさよならとかやめてほしい。意地でも探し出してやる。

「リオン、大丈夫よ。きつとあの子は近くで見守っているわ」

「母上……。はい、そうですね。体が回復したら、森へ行ってみます」

「魔の季節になって、魔物も多くなっているかもしれないわ。気を付けなさい」

「ああ……。そういえばそうでしたね。わかりました、気をつけます」

何かを察したのか、母上が僕に言う。

その言葉から、もしかしたらタマは魔物払いをしに行つたのかもしれないな、と思った。タマが住んでいた森は、タマがいるから他の魔物が来ないと言っていた。だからタマは寝込んでいる僕から離れて森にいるのではないかと。

そんな希望も持ちつつ、朝食を食べ終えた。

一応ゆつくりと食べたが、この分なら平気そうだなとは思つた。

今日はとりあえずこのまま病人食的なものを食べて、明日からは少し普通に返してもらおう。

ごちそうさまでしたとアイカさんに向けて言うと、そのまま食器

を片づけてくれた。

「それで、リミエラのことを話してもらいたいのですが」

おそらく僕が食べ終わるのを待っていたのだろう。父上と母上はまだ食卓に着いていたので、そう切り出す。

今回の件で、まずこの話を聞かなければ先に進むことはない。

「わかった、話をしよう。実はな」

「待ちなさい。わからないかもしれないけど、リミエラも一緒に話をします。だからリミエラが起きてからにしましょう」

「え？」

父上が話を始めようとした瞬間、母上が止めに入る。いやどっちですか。父上も若干テンパってるじゃないですか。その辺はちゃんと話しあっておいてくださいよ。

「あ、ああ……。じゃあ後にしようか。少し待っていてくれ、リオ」

「……わかりました」

結局父上が折れて、二人は席を立ててしまった。

……じゃあなんで残ってたんですか。

なんだか少し、肩すかしを食わされた感があったのだった。

第22話 日常（後書き）

誤字脱字・感想などありましたら気軽に伝えてください。

第23話 家族会議（前書き）

悩めば悩むほどぐだぐだになっていく不思議。
なんでだろうな……。

第23話 家族会議

少し遅めの朝を迎えたりミエラを交えての家族会議。

約束を守ってくれなかった、としばらく不機嫌だったリミエラをなだめるのに凄く苦労した。

今この場には、僕とリミエラ、そして両親の家族4人しかない。普段は大抵、アイカさんが近くにいることが多い。更に、タマと出会ってから僕のはそばを離れることが殆どなかっただけに、こうやって4人だけで顔を向き合わせるといふ状況はとても珍しいものだった。

「それで2人とも、調子はどう？」

しばらくの沈黙が続いた後、母上がそう口を開いた。

僕は問題ありませんと答え、リミエラは何のことだかわからないといった様子だった。わざわざ聞かれるほど体調の変化を感じないということだろうか。数日前まで苦しそうにしていただけに、嬉しい反応だった。

「それは良かったわ。それじゃあ、私たち家族のことをきちんと話しましょう」

母上は微笑みながらそう言うと、父上に続きを促す視線を送った。これから大事な話がある、ということがわかったのだろう。不安そうにリミエラが僕の左手を握りしめてきたので、軽く握り返し、近くに寄せた。

「今回の話、私はヴァオリ先生に聞いたただけなのだが……リオン、お前から少し状況を説明してもらえないだろうか」

「わかりました」

父上は勿論、何があったのかを大まかに把握しているのだろう。それでも当事者である僕に話をさせることで、僕らがどこまで今回のことをどう考えているか、ということを知りたいのだと思う。

僕自身が状況を整理するためにも、1月ほど前にリミエラが体調を崩したところから話を始める。魔力酔いという診断結果から魔力を流してもらったこと。再び体調を崩してしまったこと。そして2度目の診断であった“事故”のこと。引き金になった“腕輪”のことも、僕がそこで腕を無くしたことも、タマが命を張ってくれたことも。全てを話す。

「ということがありました。僕とリミエラのことを、きちんと話してほしいです」

僕が一通りの話を終えると、父上は軽く頷き、息を吐く。

「なるほど……それは確かに私たちがいけなかったのかもしれない。いずれ話すつもりではあったし、決して隠していたわけではないのだが、2人を危険な目に遭わせてしまったことを謝ろう。すまなかった」

そう頭を下げる父上は、本気で僕らを心配していた。

僕らのどちらかは2人と血が繋がっていないはずだけど、そんなこと関係なく、僕たち2人を、等しく心配していた。

「先に結論から言おうか。先生の推測に間違いはない。私たちの実子はリオン、お前だ。そしてリミエラは私の親友の子どもだ」

「……それは、少し意外です」

「どうということだ……？」

てつきり僕が捨て子とか、そういう話なのだろうと思っていた。
異世界に転生して、拾われたのだろうと、そう思っていた。

「僕は、僕が2人の実の子ではないと思っていました。それには少し理由があるのですが」

「リオン。それはここ最近であなたの様子が変わったことと関係があるのかしら？」

「……やはり、少しおかしかったでしょうが」

「急に大人びた感じがあつたわね。別に変なことをしていたとか、そういうことではないのだけど。リミエラを前よりも大事に扱うようになったことが一番大きいかしら」

やっぱり、いつまでもごまかしてばかりじゃいけないんだろうな。
僕は家族に“転生”のことを話す。

「勿論、幼いころの記憶もきちんとあります。僕は2人のことを、本当の両親だと思っています」

「リオン、それは違うわ。あなたの両親に、本物も偽物もないの。だからわざわざ“思う”必要なんてないのよ」

「母上……。そうですね、少し変なことを言ってしまった。リミエラ、ありがとう」

全てを話して尚、それを受け止めてくれる母上。その横でしっかりと僕を見据える父上。緊張感から手に汗を握っていたことに気付いたのだろう、自身も不安で仕方がないはずなのに、僕を励ますように強く手を握ってくれるリミエラ。みんな最高の家族だ。

「それで、リミエラのことですけど……」

「ああ、ちゃんと話そう。リミエラは、私が中央都市に住んでいた

頃の騎士の友人と、そのときの“聖女様”の子どもだ。聖属性の適性があるのはそのためだろう」

不安で少し震えるリミエラの手をしっかりと握り、父上から話の続きを聞く。

「役目であつたとはいえ、聖女様は体が弱かつたにも関わらず魔物討伐で先陣を切るような人だった。彼女はリミエラを産んだ後に亡くなられたそう。友人はその責任を取る、という形で殺されてしまったと聞かされた。友人のために何も出来なかつた自分をどれだけ恨んだことかわからない。リミエラは、そのとき聖女様に仕えていた方にこちらへ連れられて来たのだ」

「リミエラは命を狙われなかつたのですか？」

「いや、狙われていただろう。元々、2人の婚姻は望まれたものではなかつた。実力があつたとはいえ、たかだか一騎士と聖女様だったから。ただ、その方が心配はいらないと言っていたから、私はそれを信じることにした。例えば追手が来ようと、リミエラだけは守ると誓つて」

親友が殺されたことを後から聞かされる、というのは一体どんな気分だろう。どれだけ悔しかっただろう。一生味わいたくないものだ、ということしかわからない。

「……聖女ということとは、その方には聖属性の適性があつたんですよね？リミエラが“聖女”にされる可能性はありますか？」

「ある……かもしれない。聖属性の適性を持つ者は、国に従事している者が多い。聖女様の子であるなしに関わらず、可能性は否定出来るものではない」

「魔物討伐戦に駆り出されるような役目なら、リミエラを聖女になんてさせたくはありません」

不安げにこちらを見つめるリミエラに軽く微笑みかけ、その手を離すまいと、手に少し力を込める。

「私もそう思っている。今回のことで、一部の者はこの近くに聖属性の適性者がいると気付いただろうが、そのような輩に、大事な娘を連れていかれてたまるものか」

「そういう人たちには、きちんとお引き取り願うわ。どのような手を使ってでもね」

「父上……母上……」

「だからリオン、あなたは一番近くでリミエラを守るの。出来るわね？」

「はい、もちろんです。リミエラは僕が必ず守ります」

2人からの言葉に、決意を新たにする。一度侵した過ちは、一生かけて償っていこう。僕が不用意なことさえしなければ、こうやってリミエラを危険な目に遭わせることすらなかったのだから。

「わたしも……がんばります」

「リミエラ？」

「わたしも、にーさまをまもりますっ！」

今まで黙って聞いていたリミエラが、目を瞑りながら、両の手を強く握りしめ、そして強く言葉を発した。直後に開いた双眸には僅かに涙が溜まり、その目線は僕の右腕を捉えていた。

「わたしがにーさまをきずつけたから……。だからにーさまはわたしがまもりますっ」

「リミエラ……」

「リミエラ、あなたは十分リオンを守っているの。リオンの右腕だ

って、あなたが治したのよ」

「母上……そうだったんですか？」

きょんとしているリミエラではなく、僕が疑問を投げかける。

「その場に居合わせたという医者先生とその息子さんが、そう言っていたわ。右腕を魔法で治癒したのはリミエラだそうよ」

「その後リミエラもすぐに倒れたと言っていたから、間違いないだろう。リミエラは魔力を限界ギリギリまで使ってリオンの傷を治したのだ」

「自分で言うのもおかしい話ですが、確かにあの時は死を覚悟しました。僕の命は、リミエラに救われたんだ。本当にありがとう」

「……？ えへへっ……」

いまいちよくわかっていない様子のリミエラの頭をなでながら、思い返す。

確かにサリさんも昨日同じようなことを言っていたし、あの状況で偶然助かった、とかそんなことはあり得ないだろう。僕が気を失ったすぐ後に、リミエラが傷を塞いでくれなかったら助かるわけもなかったのだ。

「僕はリミエラに助けられたんだ。リミエラのお陰で僕が今こうしていられるんだ。だから、リミエラは僕をもう十分守ってくれていいよ」

「で、でも……」

「だから、リミエラは急がなくていいよ。僕ももう無理はしないから、リミエラはのんびりと成長して。僕を守ろうと思うのは、それからでも全然遅くないから」

「……はい」

少し納得出来ない様子のリミエラを優しく抱きしめる。

「でも、そう思ってくれてうれしいよ。リミエラがしっかり成長してくれたら、僕も安心して守られようかな」

「任せてくださいっ！」

「じゃあしばらくは、僕がリミエラを守るから。頑張るよ、応援しててね」

「はい!!」

まあしばらくっていうのは、ずっとなんか意味なんだけど。

それより2人とも、うまく丸めこんだな、みたいな顔しないでください。

そうして僕らの家族会議は幕を下ろしたのだった。

第23話 家族会議（後書き）

誤字脱字・感想などありましたら気軽に伝えてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3448x/>

異世界に転生したら妹がかわいかった

2011年11月19日05時53分発行